

藤沢市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針（素案）

からの修正部分に下線

2021年12月23日

第4回藤沢市立学校適正規模・適正配置
検討委員会 資料5

藤沢市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針
（最終案）

2022年（令和4年）1月

藤沢市立学校適正規模・適正配置検討委員会

目 次

1	はじめに	1
2	学校に関する現状と課題	
	(1) 児童生徒数の推移	2
	(2) 学校施設の老朽化の状況	4
	(3) 過大規模校・過小規模校の状況	5
	(4) 支援教育の推進	
	ア 白浜養護学校の教室不足	7
	イ 特別支援学級の全校設置	8
	ウ 不登校児童生徒への支援	10
	(5) 少人数学級に向けた動向	11
	(6) 小中一貫教育の制度	14
3	学校適正規模・適正配置の基準	
	(1) 学校規模	16
	(2) 通学距離	19
	(3) 通学区域	20
4	学校適正規模・適正配置を検討する際の留意点	
	(1) 学校規模	21
	(2) 通学距離	21
	(3) 通学区域	22
	(4) 支援教育の推進	22
	(5) 小中一貫教育の検討	22
	(6) 地域との連携	23
	(7) 統合等を行う場合の検討事項	23
5	学校適正規模・適正配置の取組方法	
	(1) 基本方針の位置付け	24
	(2) 実施計画の策定と位置付け	25
	(3) 実施計画策定後の各地区における取組	25
	(4) 基本方針等の見直し	27
	参考資料	28

1 はじめに

1970年（昭和45年）、本市には児童が約18,800人、生徒が約6,800人在籍し、市立小学校19校、市立中学校9校、市立特別支援学校1校の合計29校が設置されていました。

その後、全国的な都市部への人口集中の影響を受け、本市の児童生徒数は急増し、1980年（昭和55年）に児童数は約32,600人、市立小学校は29校となり、さらに1985年（昭和60年）に生徒数は約17,300人、市立中学校は18校に増えるなど、1970年代から1980年代にかけて市立学校の建設が続きました。

現在、本市において、児童生徒数の減少傾向は見られませんが、今後は数年のうちに、児童生徒数は徐々に減少していく見込みとなっています。

一方で、一部の地域においては、人口集中による過大規模校が存在し、仮設校舎の設置等により対応を図っていますが、数年が経過してもなお過大規模が解消されない学校があるほか、施設面では、老朽化が著しい状況です。

また、学習指導要領の改訂、小学校全学年において少人数学級の段階的实施、小中一貫教育の取組が可能になるなど、社会状況の変化に合わせ子どもたちの新しい時代の学びの環境に対応し、教育環境や学習環境を整備する必要があります。

こうした様々な課題を解決していくにあたり、教育委員会は、2021年（令和3年）5月に学識経験者、地域住民の代表、保護者の代表、学校関係者で構成する「藤沢市立学校適正規模・適正配置検討委員会（以下「検討委員会」という。）」を設置し、これからの藤沢市立小中学校における適正規模・適正配置について基本的な考え方を策定するため、検討委員会で協議するよう諮問しました。

これを受けて検討委員会では、これからの時代に求められる教育内容を勘案しつつ、児童生徒数の減少や学校施設の老朽対策などの視点を踏まえ、学校規模の適正化への対応を図り、これからの藤沢市立学校の適正規模・適正配置に関する基本的な考え方をとりまとめましたので教育委員会に答申します。

2 学校に関する現状と課題

(1) 児童生徒数の推移

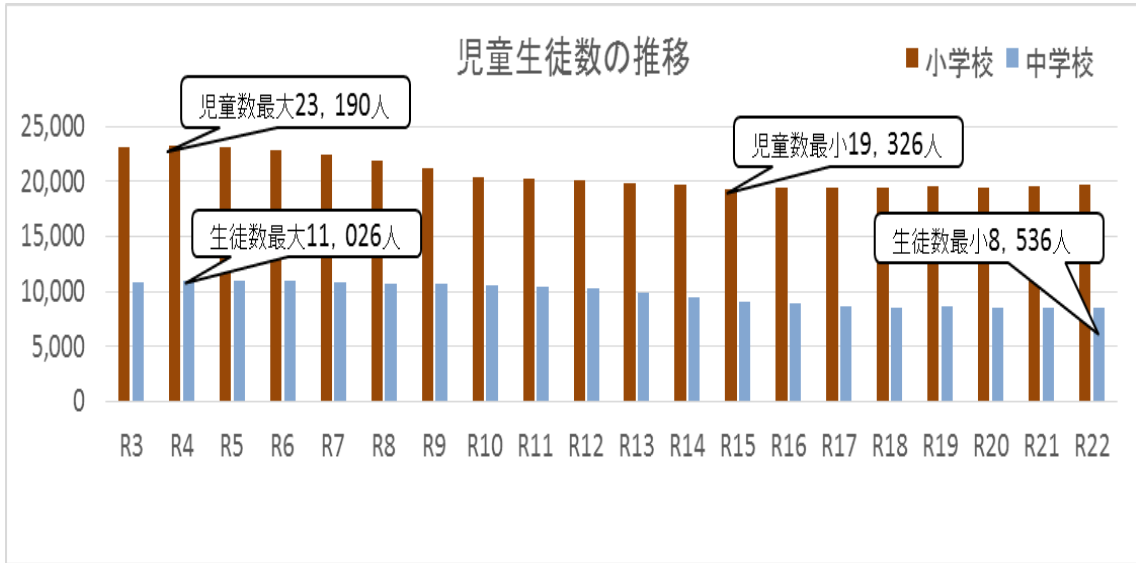
令和3年度における本市立小学校の児童数は23,135人で、今後の推計では、令和6年度まではほぼ横ばいで推移しますが、令和7年度から徐々に減少傾向に転じ、令和12年度(2030年)には約20,000人、令和22年度(2040年)には約19,600人、令和37年度(2055年)には約19,400人となる見込みであり、令和3年度と比較して約3,700人(約16%)減少する見込みとなっています。

また、令和3年度における本市立中学校の生徒数は10,779人で、令和11年度まではほぼ横ばいで推移しますが、令和12年度から徐々に減少傾向に転じ、令和15年度(2033年)には約9,100人、令和22年度(2040年)には約8,500人、その後、僅かな微増傾向に転じますが、令和37年度(2055年)には約8,700人となる見込みであり、令和3年度現在と比較して約2,100人(約19%)減少する見込みとなっています。

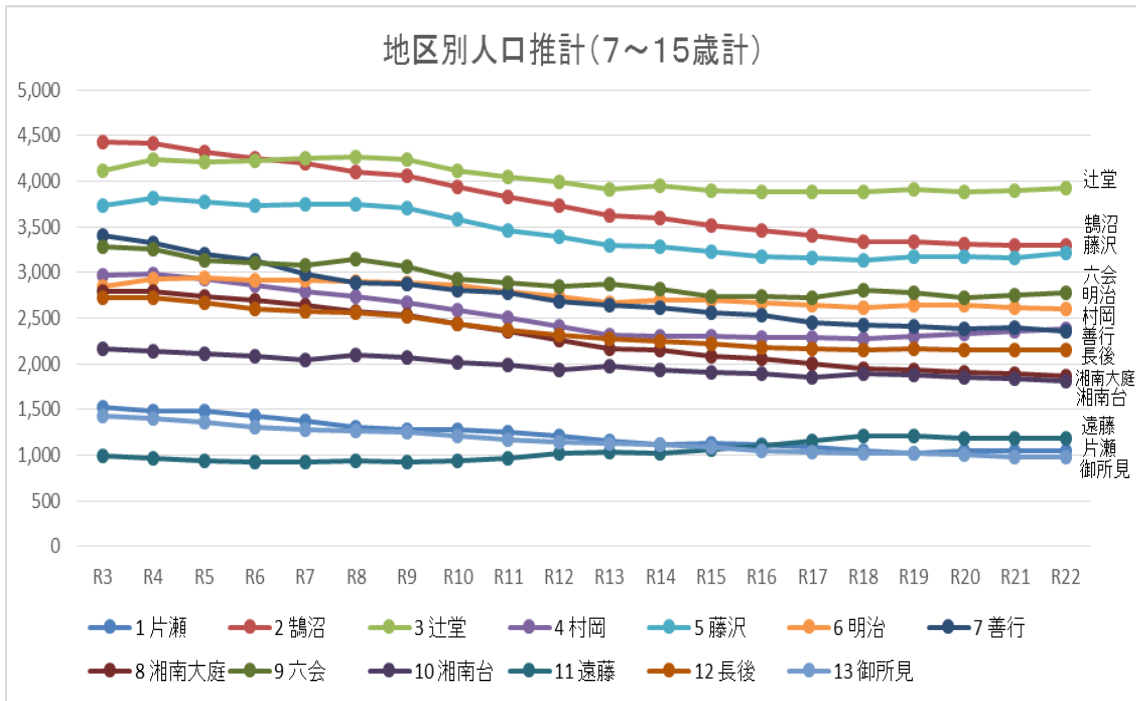
このように本市における児童生徒数を推計全体で見れば、児童数は令和7年度から、生徒数は令和12年度から減少傾向となりますが、令和3年度以降の地区ごとの推計を比較すると、小学校では、令和9年度の時点で、村岡、湘南台地区では増加しているのに対し、片瀬、湘南大庭、遠藤、御所見地区については2割以上減少する見込みであり、中学校では、令和15年度の時点で、村岡、湘南台地区では増加しているのに対し、善行地区で2割、湘南大庭、遠藤地区で3割、片瀬、御所見地区で4割程度減少する見込みとなるなど、地域によって人口増減に不均衡が生じることが予測されています。

なお、児童生徒数の見込み値は、小学校の令和9年度まで及び中学校の令和15年度までは、大規模開発などの社会増の要素も加味した「令和3年度児童・生徒数推計(以下「児童生徒数推計」という。)」値を用いたものであり、それ以降は、当該値に「2017年度藤沢市将来人口推計(平成27年実施国勢調査に基づくもの)の地区別人口増減率を反映させたものになります。

【資料1：児童生徒数の推移】



【資料2：児童生徒数の推移】



(2021年度(令和3年)を100とした場合の各年度の割合)

	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16	R17	R18	R19	R20	R21	R22
辻堂	100	103.0	102.2	102.8	103.4	103.7	103.0	100.0	98.3	96.9	95.1	95.9	94.6	94.3	94.5	94.3	95.1	94.3	94.7	95.4
鶴沼	100	99.9	97.7	96.1	94.8	92.8	91.9	88.9	86.7	84.5	82.0	81.3	79.4	78.2	77.1	75.6	75.5	74.7	74.5	74.4
藤沢	100	102.1	101.0	100.0	100.3	100.1	99.3	96.0	92.7	90.7	88.1	87.8	86.4	85.0	84.7	83.9	84.9	84.8	84.7	85.9
六会	100	99.0	95.5	94.6	93.8	95.7	93.5	89.4	88.1	86.5	87.5	86.1	83.5	83.3	83.1	85.3	84.7	83.0	83.9	84.8
明治	100	102.8	103.1	102.5	102.5	101.9	101.5	100.2	97.9	96.0	93.9	94.8	94.5	93.5	92.8	92.0	92.6	92.6	91.7	91.3
村岡	100	100.3	98.4	96.2	94.0	92.0	89.8	87.2	84.2	81.1	78.1	77.5	77.5	77.2	77.0	76.7	77.4	78.5	79.3	80.3
善行	100	97.6	93.9	92.0	87.5	85.0	84.3	82.3	81.6	78.8	77.7	76.8	75.1	74.6	72.1	71.3	70.9	70.2	70.6	69.2
長後	100	100.0	98.0	95.7	94.5	94.0	92.6	89.8	86.9	84.9	83.4	82.6	81.4	80.0	79.4	79.3	79.5	79.2	78.8	79.2
湘南大庭	100	100.3	98.1	96.6	94.6	92.4	90.8	87.3	84.5	81.3	77.8	77.1	74.9	73.6	71.8	70.0	69.6	68.5	68.0	67.0
湘南台	100	99.1	97.3	96.3	94.5	96.8	95.4	93.3	91.8	89.6	91.1	89.6	88.3	87.6	85.8	87.6	86.6	85.8	85.2	83.7
遠藤	100	97.2	95.1	93.8	93.6	94.7	93.2	94.4	97.3	102.9	104.0	103.5	106.6	111.4	117.2	121.9	121.7	119.9	119.1	120.0
片瀬	100	96.9	96.7	93.5	90.3	85.6	83.5	83.6	81.7	79.0	75.3	73.4	74.2	72.9	71.0	68.3	67.2	69.0	69.0	68.3
御所見	100	98.4	95.2	91.6	89.6	88.5	87.7	85.2	81.7	80.2	79.2	78.2	76.0	73.4	72.2	71.9	71.3	70.4	68.9	68.7

(2) 学校施設の老朽化の状況

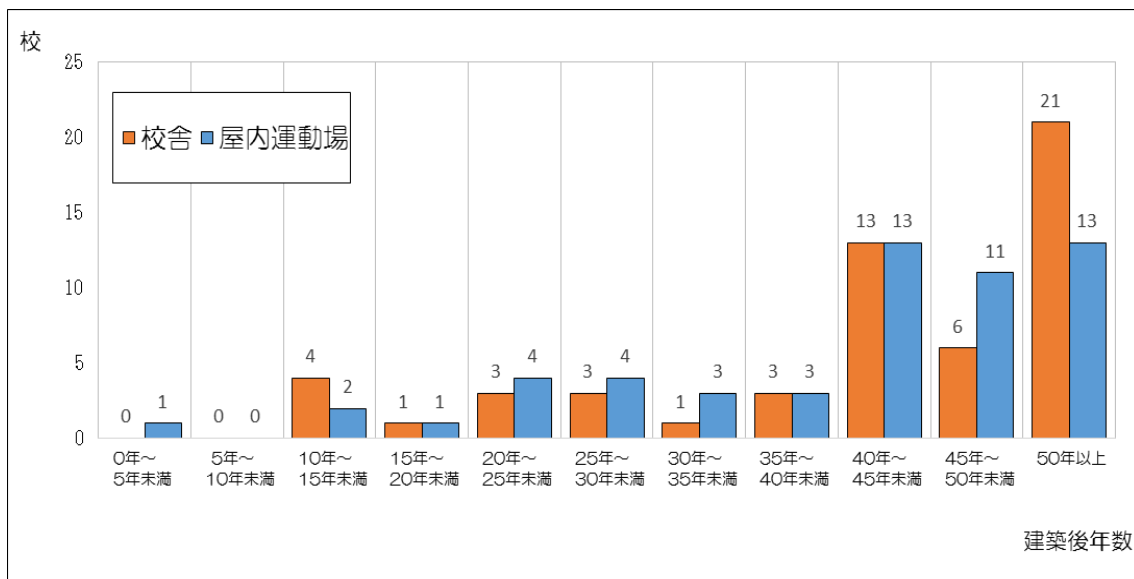
本市の学校施設の老朽化の状況としては、建築後50年を経過した校舎棟を保有する学校は21校、建築後40年では40校となっており、老朽化が著しい状況となっています。(資料3-1参照)

多くの学校の校舎棟は、児童生徒の急増の際に増築されるなど、一体の建物であっても建築年次が異なっており、耐震補強済みの旧耐震基準の建物と新耐震基準の建物が混在している学校も数多く存在します。

また、屋内運動場についても、建築後50年を経過した学校は13校、建築後40年では37校となっており、校舎棟と同様に老朽化が進んでいます。

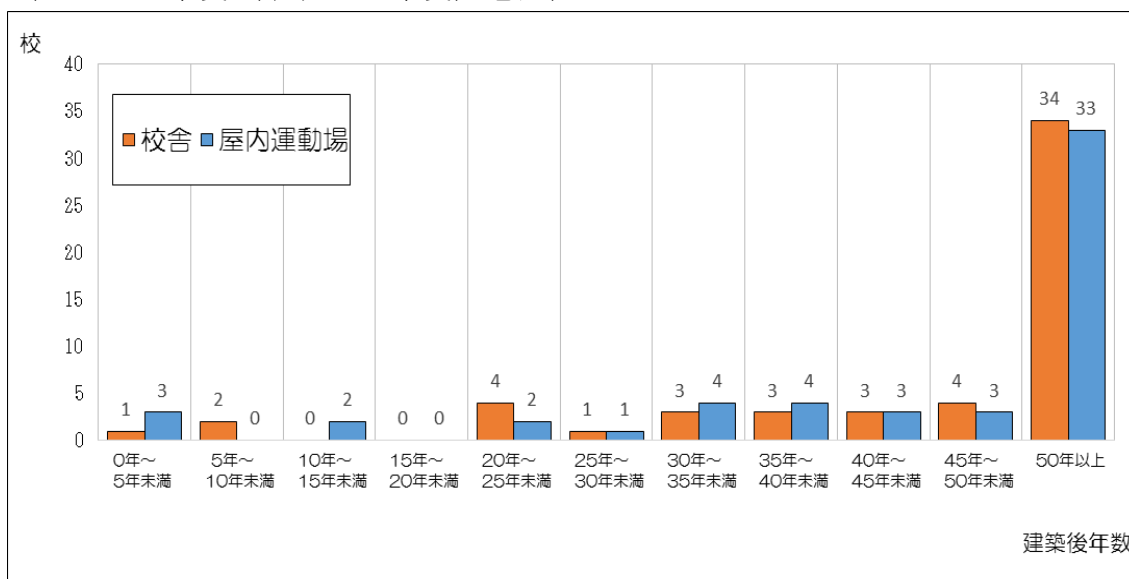
今後、学校施設の老朽解消の対策として、「学校施設再整備基本方針」及び「学校施設再整備実施計画」に基づき、改築や長寿命化改修といった再整備事業を計画的に進めていくことが必要となります。また、再整備事業の実施に当たっては、学校適正配置における方針や計画との整合を図りながら進めていく必要があります。

【資料3-1：最も古い校舎及び屋内運動場の建築後年数ごとの学校数】
(2021年(令和3年)4月現在)



【資料 3-2 : 最も古い校舎及び屋内運動場の建築後年数ごとの学校数
(10年後)】

(2031年度(令和13年度)想定)



※「藤沢市立学校施設再整備第2期実施計画」に基づく再整備事業を計画どおり実施した場合

(3) 過大規模校・過小規模校の状況

本市においては、令和3年5月時点で鵜洋小学校(35学級)と辻堂小学校(35学級)の2校が、31学級を超える規模の学校(以下「過大規模校」という。)となっています。

過大規模校については、クラス替えがしやすい、切磋琢磨する機会が多いなどの面もありますが、教室数の不足により、一部の児童については仮設校舎で授業を受けるなど、教育環境に支障をきたしている面があり、過大規模解消に向けた取組が求められています。

一方、小学校で5学級以下、中学校で2学級以下の小規模の学校(以下「過小規模校」という。)は、令和3年5月時点で、本市においては存在していないものの、将来的な少子化を見据え、今後の推移を注視していく必要があります。

【資料4：学校規模別一覧（特別支援学級を除く）】

令和3年5月現在

地区名	学校名	児童生徒数	学級数	学校規模
片瀬	片瀬小学校	741	23	適正規模
	片瀬中学校	445	12	適正規模
鶴沼	鶴沼小学校	909	27	大規模
	鶴洋小学校	1,215	35	過大規模
	鶴南小学校	524	18	適正規模
	鶴沼中学校	827	22	適正規模
辻堂	辻堂小学校	1,256	35	過大規模
	八松小学校	712	23	適正規模
	高砂小学校	566	18	適正規模
	浜見小学校	387	12	適正規模
	湘洋中学校	809	21	適正規模
	高浜中学校	410	12	適正規模
	白浜養護学校	145	41	—
村岡	村岡小学校	525	18	適正規模
	新林小学校	571	18	適正規模
	高谷小学校	884	25	大規模
	藤ヶ岡中学校	767	20	適正規模
	村岡中学校	613	16	適正規模
藤沢	藤沢小学校	582	19	適正規模
	本町小学校	802	25	大規模
	大道小学校	664	20	適正規模
	大鋸小学校	792	24	適正規模
	大清水小学校	334	12	適正規模
	第一中学校	742	20	適正規模
	大清水中学校	294	9	小規模
明治	明治小学校	792	24	適正規模
	羽鳥小学校	1,048	30	大規模
	明治中学校	609	18	適正規模
	羽鳥中学校	528	15	適正規模
善行	善行小学校	406	13	適正規模
	俣野小学校	289	12	適正規模
	大越小学校	613	19	適正規模
	善行中学校	430	12	適正規模
湘南大庭	大庭小学校	447	14	適正規模
	滝の沢小学校	573	19	適正規模
	駒寄小学校	514	18	適正規模
	小糸小学校	286	12	適正規模
	大庭中学校	544	14	適正規模
	滝の沢中学校	704	18	適正規模
六会	六会小学校	974	28	大規模
	亀井野小学校	635	19	適正規模
	天神小学校	505	17	適正規模
	石川小学校	630	20	適正規模
	六会中学校	804	21	適正規模
湘南台	湘南台小学校	770	24	適正規模
	湘南台中学校	561	15	適正規模
遠藤	秋葉台小学校	646	19	適正規模
	秋葉台中学校	362	10	小規模
長後	長後小学校	847	24	適正規模
	富士見台小学校	678	21	適正規模
	長後中学校	338	10	小規模
	高倉中学校	439	12	適正規模
御所見	御所見小学校	461	16	適正規模
	中里小学校	289	11	小規模
	御所見中学校	404	12	適正規模

(4) 支援教育の推進

ア 白浜養護学校の教室不足

白浜養護学校の現校舎については、平成9年に75名定員を想定して改築しましたが、令和3年5月の在籍者数は145人にのぼり、過大規模の状況になっています。

推計値では今後も児童生徒数が増え続け、令和10年度には現在と比較して13教室不足の見込みとなっているため、早急な対応が必要となっています。

資料5は白浜養護学校児童生徒数の推移です。令和元年度までは、小学部新1年生は多くて15人（平成28年度）、その後横ばい傾向で、高止まりが続いているように見えてましたが、令和2年度・令和3年度ともに小学部新1年生が20人となり、過大規模・過密化の状況が加速化しています。

このため、教室不足を解消する対策として、プレイルームや多目的ホール、教材室、美術室、音楽室、PC教室を普通教室に転用しており、これ以上転用可能な特別教室がない状況です。

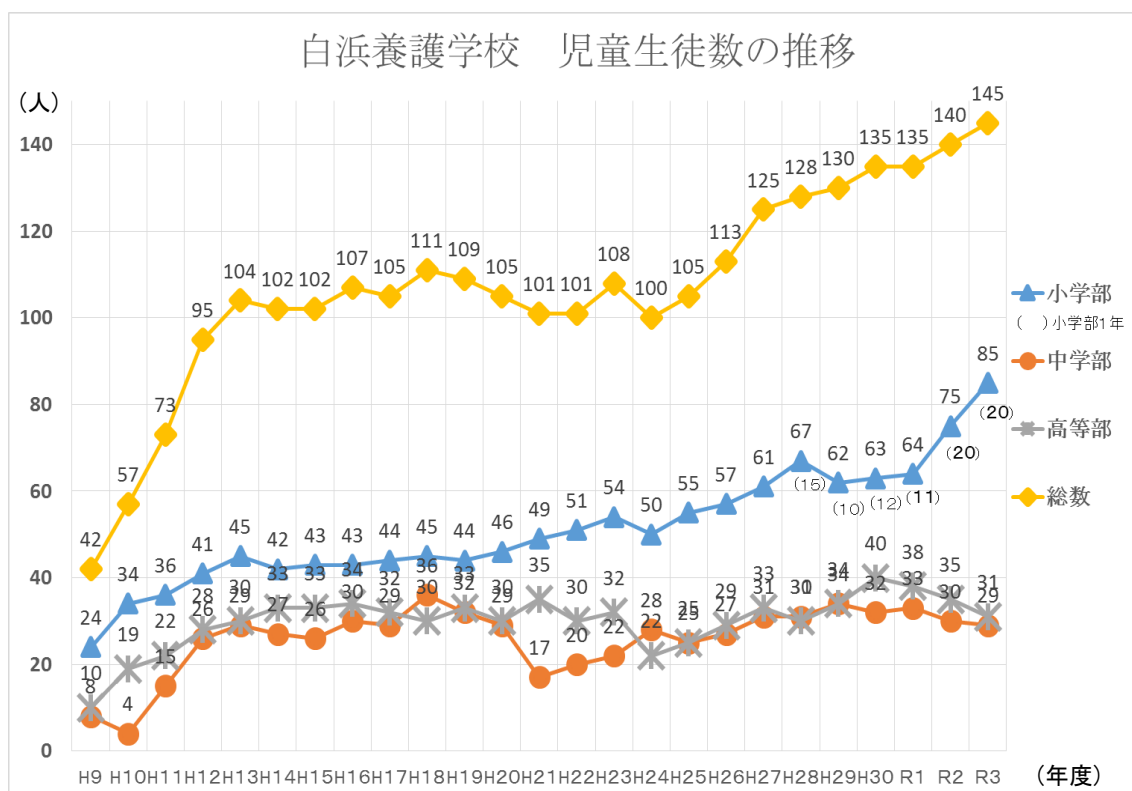
現在、こうした状況を解消するため、学校敷地内に仮設校舎を設置し、令和4年度より供用開始を予定しています。

また、令和3年12月に神奈川県教育委員会が作成した「かながわ特別支援教育推進指針（仮称）」（素案修正版）では、湘南地域（鎌倉市、藤沢市、茅ヶ崎市、寒川町）の整備の方向として、県立特別支援学校の受け入れ枠を拡大することが記されております。

今後、湘南地域にある知的障害教育部門の学校に肢体不自由教育部門が併置されること等によって県立特別支援学校の受け入れ枠が拡大されれば、白浜養護学校を含めた湘南地域にある特別支援学校の過大規模の解消につながることを期待されます。

引き続き、神奈川県と緊密に連携を図りながら、新たに設置される障がい種や学部、通学区域等の状況を踏まえ、白浜養護学校過大規模化に伴う教室不足の解消に向けて、長期的な対応案についても検討します。

【資料 5：白浜養護学校 児童生徒数の推移】



イ 特別支援学級の全校設置

教育委員会では、市立小中学校全54校に特別支援学級の設置を目指していますが、令和3年5月現在、小学校では15校、中学校では5校が未設置となっており、全校設置には至っていません。

一方、市内の特別支援学級に在籍する児童生徒の数は、学校教育法の一部改正により、特別支援教育を推進することが法律上明確にされた平成19年から比べると、およそ2倍に増えています。特別支援学級が未設置の学区に居住する児童生徒は、特別支援学級のある学区外の学校へ通学せざるを得ない状況から、早急にすべての小中学校に特別支援学級を設置していく必要があります。

特別支援学級を設置するためには、校内に最低でも2教室を必要とします。またプレイルームや多目的ホール、作業室といった特別教室や設備は豊かな教育活動には欠かすことができず、こうした環境整備は、藤沢市立学校適正規模・適正配置の考え方の中にしっかりと盛り込む必要があります。

なお、本市における特別支援学級の設置状況は、次のとおりです。

- ・「知的」「自閉症・情緒」学級設置校 (2021年(令和3年)5月現在)
 小学校…20校(全35校中)
 中学校…14校(全19校中)

特別支援学級未設置校

小学校(15校)				中学校(5校)	
藤沢	鶴沼	辻堂	鶴洋	明治	六会
八松	高砂	大越	羽鳥	湘洋	藤ヶ岡
新林	中里	大鋸	高谷	秋葉台	
小糸	大清水※1	石川			

※1・・・令和4年度開設校

- ・特別支援学級設置率
 県内 小学校96% 中学校96% (2020年(令和2年)5月現在)
 本市 // 57% // 74% (2021年(令和3年)5月現在)

【資料6：特別支援学級 児童生徒数の推移】

特別支援学級人数の集計【令和3年度 児童・生徒数推移(令和3年6月学務保健課)】

(単位:人)

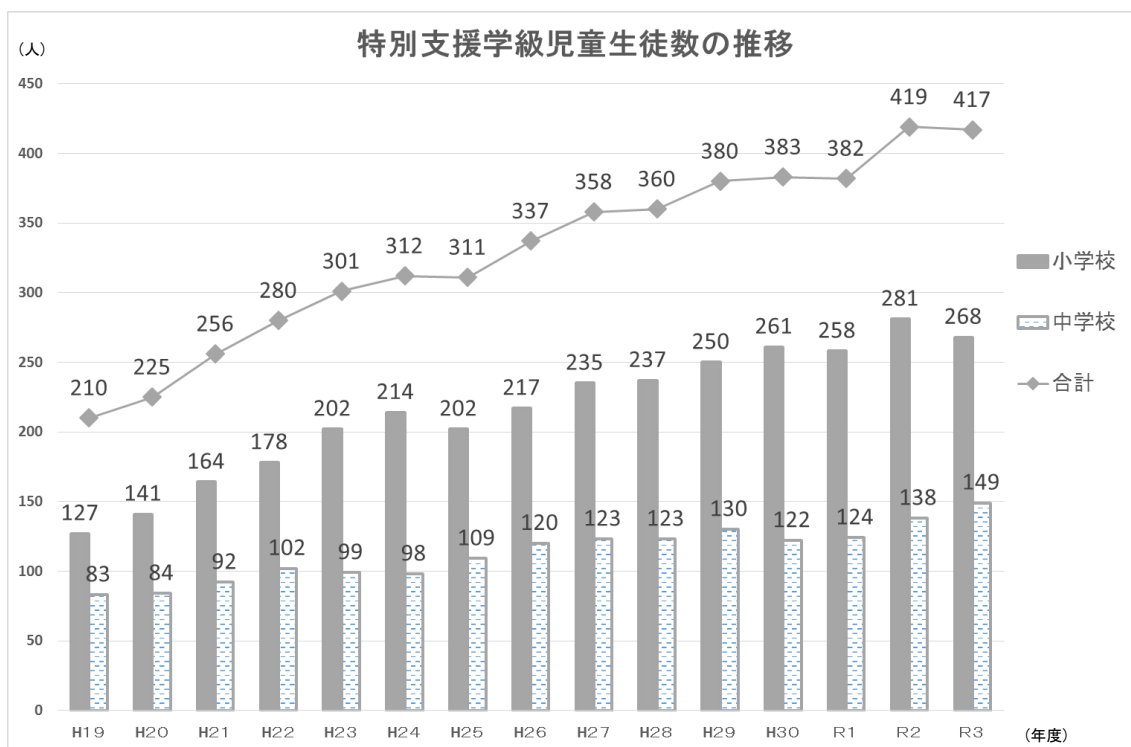
市立学校全体	H19	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
小学校児童数	22,285	23,051	23,118	23,142	23,083	23,246	23,320	23,234	23,135
中学校生徒数	9,770	10,492	10,545	10,615	10,722	10,636	10,479	10,588	10,779
合計	32,055	33,543	33,663	33,757	33,805	33,882	33,799	33,822	33,914

(単位:人)

特別支援学級	H19	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
小学校児童数	127	217	235	237	250	261	258	281	268
中学校生徒数	83	120	123	123	130	122	124	138	149
合計	210	337	358	360	380	383	382	419	417

(単位:%)

特別支援学級 児童生徒割合	H19	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
小学校	0.57	0.94	1.02	1.02	1.08	1.12	1.11	1.21	1.16
中学校	0.85	1.14	1.17	1.16	1.21	1.15	1.18	1.30	1.38
合計	0.66	1.00	1.06	1.07	1.12	1.13	1.13	1.24	1.23



ウ 不登校児童生徒への支援

本市の不登校児童生徒数は、平成29年度が574人、平成30年度が618人、令和元年度が696人と増加が続いており、児童生徒指導上の喫緊の課題となっています。

不登校はどの児童生徒にも起こり得ることとして捉え、不登校の児童生徒一人ひとりの状況に応じて、学校内外における多様な学びの機会を確保し、将来の社会的自立に向けた支援を充実させることが求められています。

各学校において、不登校を生じさせないような魅力あるより良い学校づくり、「心の居場所」としての学校づくりを進めるために、児童生徒の実態に配慮したきめ細かな支援・指導を行うことが可能となるよう、教育委員会としては教育条件等の整備が必要となります。

また、施設・設備面では、不登校児童生徒が安心して学習や相談支援を受けられるような別室等の環境整備や、情報通信機器の整備等が重要となります。

(5) 少人数学級に向けた動向

少人数学級を実施した場合、1学級あたりの児童生徒数が少人数となることにより、一人ひとりの理解度や興味・関心を踏まえた学習指導を充実させることが可能となるほか、児童生徒指導上の諸課題に即した、より効果的な支援や、きめ細やかな指導ができることが期待されます。

このような効果を背景に、国は、令和3年4月に「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」を改正し、公立小学校について、令和3年度から5年間かけて、公立小学校全学年の1学級あたりの人数を段階的に35人までに引き下げることとしました。

さらに、同年6月には、国の教育再生実行会議が、小学校での取組状況の検証等を踏まえ、公立中学校についても望ましい指導体制のあり方について検討するよう提言をしており、現在は、少人数学級の拡充が焦点となっています。

そのため、本市の少人数学級の検討に当たり、こうした動向等を踏まえ、取組を進めていく必要があることから、本基本方針における学級数については、小学校については35人学級、中学校については現行の40人学級と将来的に実施の可能性がある35人学級の併記により作成することとします。

【資料 7 : 35 人学級への移行に伴う必要教室数の推移 (小学校)】

小学校	使用可能 教室数	特別支援 学級	2021年 R3	2022年 R4	2023年 R5	2024年 R6	2025年 R7	2030年 R12	2035年 R17	2040年 R22
	35人学級対象学年		1~2	1~3	1~4	1~5	1~6			
1 藤沢小	20		19	18	18	18	18	18	18	18
2 明治小	31	設置済	24	27	27	28	29	30	30	30
3 鶴沼小	31		27	29	30	32	32	30	30	30
4 本町小	25	設置済	25	25	25	25	25	18	18	18
5 村岡小	20	設置済	18	18	19	19	19	18	18	18
6 六会小	34	設置済	28	31	33	33	33	30	30	30
7 辻堂小	37		35	39	39	39	38	30	30	36
8 鶴洋小	36		35	35	36	37	36	30	30	30
9 片瀬小	27	設置済	23	22	22	22	22	18	18	18
10 大道小	23	設置済	20	20	21	22	23	24	24	24
11 秋葉台小	26	設置済	19	18	18	18	18	18	24	24
12 御所見小	22	設置済	16	14	13	13	13	12	12	12
13 長後小	29	設置済	24	25	26	27	27	24	24	24
14 八松小	23		23	24	25	25	26	24	24	24
15 高砂小	19		18	19	21	21	22	18	18	24
16 善行小	17	設置済	13	13	14	14	15	12	12	12
17 富士見台小	23	設置済	21	22	23	22	22	18	18	18
18 鶴南小	18	設置済	18	17	18	18	18	18	18	18
19 浜見小	16	設置済	12	12	12	12	12	12	12	12
20 俣野小	18	設置済	12	12	12	12	12	12	12	12
21 大越小	22		19	19	18	18	18	18	12	12
22 羽鳥小	30		30	30	30	29	28	24	24	24
23 湘南台小	27	設置済	24	24	25	25	25	24	24	24
24 大庭小	25	設置済	14	16	16	15	14	12	12	12
25 亀井野小	27	設置済	19	20	21	22	23	24	24	24
26 新林小	25		18	22	24	25	25	24	24	24
27 中里小	21		11	11	10	10	9	12	6	6
28 滝の沢小	28	設置済	19	19	18	18	17	12	12	12
29 大鋸小	24		24	25	25	24	24	18	18	18
30 天神小	20	設置済	17	16	17	17	17	18	18	18
31 駒寄小	20	設置済	18	17	17	16	16	12	12	12
32 高谷小	28		25	26	26	26	26	24	24	24
33 小糸小	23		12	12	12	12	12	12	6	6
34 大清水小	14		12	12	12	12	12	12	12	12
35 石川小	22		20	20	20	20	20	18	18	18
合計	851		712	729	743	746	746	678	666	678
2021年 (R3) 比			—	102.4%	104.4%	104.8%	104.8%	95.2%	93.5%	95.2%

注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

【資料 8 : 40 人学級の必要教室数の推移 (中学校)】

中学校	使用可能教室数	特別支援学級	2021年 R3	2026年 R8	2027年 R9	2028年 R10	2029年 R11	2030年 R12	2035年 R17	2040年 R22
1 第一中	21	設置済	20	19	20	20	19	18	15	15
2 明治中	20		18	20	20	21	22	22	21	21
3 鶴沼中	28	設置済	22	25	26	25	25	25	21	18
4 六会中	24		21	21	21	21	21	20	18	18
5 片瀬中	18	設置済	12	11	11	11	11	10	9	6
6 御所見中	19	設置済	12	10	9	9	9	9	6	6
7 湘洋中	28		21	22	23	23	22	21	18	18
8 長後中	16	設置済	10	12	11	11	10	10	9	9
9 藤ヶ岡中	21		20	22	21	20	20	19	15	15
10 高浜中	16	設置済	12	12	13	13	13	12	12	12
11 善行中	22	設置済	12	12	11	11	11	12	9	9
12 秋葉台中	16		10	9	9	9	9	9	9	9
13 大庭中	22	設置済	14	15	14	14	13	13	9	9
14 村岡中	19	設置済	16	20	21	21	21	21	21	21
15 湘南台中	20	設置済	15	17	17	17	17	18	18	18
16 高倉中	17	設置済	12	11	10	10	11	11	9	9
17 滝の沢中	27	設置済	18	18	18	18	17	17	12	12
18 大清水中	15	設置済	9	9	9	9	9	9	9	9
19 羽島中	18	設置済	15	13	13	12	12	11	9	9
合計	387		289	298	297	295	292	287	249	243
2021年 (R3) 比			—	103.1%	102.8%	102.1%	101.0%	99.3%	86.2%	84.1%

注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

【資料 9 : 35 人学級の必要教室数の推移 (中学校)】

中学校	使用可能教室数	特別支援学級	2021年 R3	2026年 R8	2027年 R9	2028年 R10	2029年 R11	2030年 R12	2035年 R17	2040年 R22
2026年度から35人学級を実施した場合の対象学年			—	1	1~2	1~3				
1 第一中	21	設置済	20	20	22	23	22	20	18	18
2 明治中	20		18	21	22	24	25	25	24	24
3 鶴沼中	28	設置済	22	27	29	29	28	28	21	21
4 六会中	24		21	22	23	24	23	22	21	21
5 片瀬中	18	設置済	12	11	11	12	12	11	9	9
6 御所見中	19	設置済	12	11	11	11	10	9	6	6
7 湘洋中	28		21	23	25	26	25	24	18	18
8 長後中	16	設置済	10	12	12	12	12	11	9	9
9 藤ヶ岡中	21		20	23	23	23	23	22	18	18
10 高浜中	16	設置済	12	12	13	13	14	13	12	12
11 善行中	22	設置済	12	13	13	13	12	12	12	9
12 秋葉台中	16		10	9	9	10	10	10	9	12
13 大庭中	22	設置済	14	15	15	15	15	14	9	9
14 村岡中	19	設置済	16	21	22	23	23	24	24	24
15 湘南台中	20	設置済	15	18	19	20	19	19	21	21
16 高倉中	17	設置済	12	11	11	11	12	12	12	9
17 滝の沢中	27	設置済	18	19	20	21	20	19	15	15
18 大清水中	15	設置済	9	9	9	9	9	9	9	9
19 羽島中	18	設置済	15	14	15	14	13	12	9	9
合計	387		289	311	324	333	327	316	276	273
2021年 (R3) 比			—	107.6%	112.1%	115.2%	113.1%	109.3%	95.5%	94.5%

注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

(6) 小中一貫教育の制度

義務教育9年間を見通した計画的・継続的な学力・学習意欲の向上や、いわゆる「中1ギャップ」への対応といった観点から、地域の実情に応じた小中一貫教育の取組が全国的に進められる中、9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の制度となる「義務教育学校」の設置を可能とした改正学校教育法が成立し、2016年（平成28年）4月1日に施行されました。

小中一貫教育においては、一人の校長の下で一つの教職員集団が一貫した教育課程を編成・実施する9年制の学校で教育を行う形態（義務教育学校）と、組織上独立した小学校及び中学校が義務教育学校に準じる形で一貫した教育を施す形態（小中一貫型小学校・中学校）の、大きく2つの形態が制度化されています。義務教育学校及び小中一貫型小学校・中学校のいずれも、施設一体型のほか施設隣接型、施設分離型といった施設形態に関わらず設置が可能とされています。

また、これらの学校においては、9年間の教育課程を「4-3-2」や「5-4」など、指導上の工夫により学年段階を区切ることが可能です。

なお、国では学校の標準規模を、義務教育学校については18学級以上27学級以下、小中一貫型小学校・中学校については、小学校・中学校それぞれ12学級以上18学級以下と定めていることから、本市が小中一貫教育の検討を行う際は、学校規模が過大になることで様々な問題が生じることのないよう、留意する必要があります。

【参考1 小中一貫教育制度について】

小中連携教育

小中学校段階の教職員が互いに情報交換や交流を行うことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育

小中一貫教育

小中連携教育のうち、小中学校段階の教職員が、目指す子ども像を共有するとともに、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育

義務教育学校

一人の校長のもと、一つの教職員組織が置かれ、義務教育9年間の学校目標を設定し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校

小中一貫型小学校・中学校

組織上独立した小学校及び中学校が一貫した教育を施すかたちでそれぞれに校長、教職員組織を有する学校

併設型小学校・中学校

同一の設置者

連携型小学校・中学校

異なる設置者

いずれの学校も施設形態（一体型、隣接型、分離型）は問わない

3 学校適正規模・適正配置の基準

学校は、基礎学力を身に付けるだけではなく、子ども同士が豊かな人間関係を築き、社会性を身に付ける場でもあります。また、様々な形態による効果的な学習を行うことや、集団の相互作用による思考力の育成を図るためにも、活動に応じて少人数のグループから大きな集団まで、適切な規模の集団を組み、多様な教育活動を展開する必要があります。（P 29～32 参考資料「1 学校規模に起因する特性」参照）

また、あわせて新型コロナウイルス感染症を踏まえ、教室に空間的ゆとりを確保しつつ、一人ひとりに寄り添った指導やケアを提供できる教育環境を確保することが求められています。

そこで、これらを踏まえ、多様な教育活動を展開しやすい学校規模を「適正規模」として、次のとおり基準を定めることとします。

なお、本市における「適正規模」以外の学校については、それぞれの規模に応じた教育活動を展開していることから、これらの学校規模が「不適正」ということではありません。

（1）学校規模

学校教育法施行規則及び文部科学省作成の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を踏まえ、次のとおり本市における学校規模の基準を定めます。

小学校、中学校ともに12学級以上24学級以下 とする。
これにより、小学校では、1学年あたり2学級から4学級
中学校では、1学年あたり4学級から8学級 となります。

＜学校規模の目安＞

小学校学級数	中学校学級数	状態
1～5学級	1～2学級	過小規模
6～11学級	3～11学級	小規模
12～24学級	12～24学級	適正規模
25～30学級	25～30学級	大規模
31学級～	31学級～	過大規模

【資料10：学級数の推移及び学校規模】

(小学校)

	2021年 R3	2025年 R7	2030年 R12	2035年 R17	2040年 R22	2040年 R22 の規模
藤沢小	19	18	18	18	18	適正規模
明治小	24	29	30	30	30	大規模
鶴沼小	27	32	30	30	30	大規模
本町小	25	25	18	18	18	適正規模
村岡小	18	19	18	18	18	適正規模
六会小	28	33	30	30	30	大規模
辻堂小	35	38	30	30	36	過大規模
鶴洋小	35	36	30	30	30	大規模
片瀬小	23	22	18	18	18	適正規模
大道小	20	23	24	24	24	適正規模
秋葉台小	19	18	18	24	24	適正規模
御所見小	16	13	12	12	12	適正規模
長後小	24	27	24	24	24	適正規模
八松小	23	26	24	24	24	適正規模
高砂小	18	22	18	18	24	適正規模
善行小	13	15	12	12	12	適正規模
富士見台小	21	22	18	18	18	適正規模
鶴南小	18	18	18	18	18	適正規模
浜見小	12	12	12	12	12	適正規模
俣野小	12	12	12	12	12	適正規模
大越小	19	18	18	12	12	適正規模
羽鳥小	30	28	24	24	24	適正規模
湘南台小	24	25	24	24	24	適正規模
大庭小	14	14	12	12	12	適正規模
亀井野小	19	23	24	24	24	適正規模
新林小	18	25	24	24	24	適正規模
中里小	11	9	12	6	6	小規模
滝の沢小	19	17	12	12	12	適正規模
大鋸小	24	24	18	18	18	適正規模
天神小	17	17	18	18	18	適正規模
駒寄小	18	16	12	12	12	適正規模
高谷小	25	26	24	24	24	適正規模
小糸小	12	12	12	6	6	小規模
大清水小	12	12	12	12	12	適正規模
石川小	20	20	18	18	18	適正規模

(中学校)

		2021年 R3	2025年 R7	2030年 R12	2035年 R17	2040年 R22	2040年 R22 の規模
第一中	40人学級	20	19	18	15	15	適正規模
	35人学級	—	—	20	18	18	適正規模
明治中	40人学級	18	20	22	21	21	適正規模
	35人学級	—	—	25	24	24	適正規模
鶴沼中	40人学級	22	25	25	21	18	適正規模
	35人学級	—	—	28	21	21	適正規模
六会中	40人学級	21	21	20	18	18	適正規模
	35人学級	—	—	22	21	21	適正規模
片瀬中	40人学級	12	11	10	9	6	小規模
	35人学級	—	—	11	9	9	小規模
御所見中	40人学級	12	11	9	6	6	小規模
	35人学級	—	—	9	6	6	小規模
湘洋中	40人学級	21	22	21	18	18	適正規模
	35人学級	—	—	24	18	18	適正規模
長後中	40人学級	10	11	10	9	9	小規模
	35人学級	—	—	11	9	9	小規模
藤ヶ岡中	40人学級	20	22	19	15	15	適正規模
	35人学級	—	—	22	18	18	適正規模
高浜中	40人学級	12	12	12	12	12	適正規模
	35人学級	—	—	13	12	12	適正規模
善行中	40人学級	12	12	12	9	9	小規模
	35人学級	—	—	12	12	9	小規模
秋葉台中	40人学級	10	9	9	9	9	小規模
	35人学級	—	—	10	9	12	適正規模
大庭中	40人学級	14	15	13	9	9	小規模
	35人学級	—	—	14	9	9	小規模
村岡中	40人学級	16	20	21	21	21	適正規模
	35人学級	—	—	24	24	24	適正規模
湘南台中	40人学級	15	17	18	18	18	適正規模
	35人学級	—	—	19	21	21	適正規模
高倉中	40人学級	12	12	11	9	9	小規模
	35人学級	—	—	12	12	9	小規模
滝の沢中	40人学級	18	18	17	12	12	適正規模
	35人学級	—	—	19	15	15	適正規模
大清水中	40人学級	9	9	9	9	9	小規模
	35人学級	—	—	9	9	9	小規模
羽鳥中	40人学級	15	14	11	9	9	小規模
	35人学級	—	—	12	9	9	小規模

【参考2 標準学級数について】

学校教育法施行規則第41条では、「小学校の学級数は12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別な事情があるときはこの限りではない。」としています。(中学校については同法施行規則第79条で準用)

【参考3 公立小学校・中学校における適正な学校規模について】

文部科学省では、従来から25学級以上の学校を大規模校、31学級以上の学校を過大規模校とした上で、過大規模校については速やかにその解消を図るよう、設置者に対して促してきており、地域によっては、このことを踏まえ、国の基準である12～18学級を下回る場合の基準と併せて、標準を超える規模を分類して独自に大規模校や過大規模校の目安を設定し、必要な対応を検討している事例も見られます。(平成27年1月27日文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」から抜粋)

(2) 通学距離

本市では、市域の大半が市街地であり、その交通事情等の状況を踏まえると、自転車通学は困難であることから、徒歩による通学を原則とします。

徒歩での通学を前提としたうえで、児童生徒の体力、生活に対する影響などを考慮した結果、望ましい通学距離は、小学校では片道おおむね2km以内、中学校では片道おおむね3km以内と考えられることから、この目安に基づく通学距離の実現を目指します。

【参考4 国の通学距離の考え方】

義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令第4条(適正な学校規模の条件)では、「通学距離が、小学校にあってはおおむね4キロメートル以内、中学校及び義務教育学校にあってはおおむね6キロメートル以内であること。」として定めています。

また、文部科学省は「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」において、同法施行令に基づき通学条件を通学距離によって捉えることが一般的であること、通学距離の基準を定めている自治体もあるものの、そのほとんどが上記以内又はそれ以下の距離を基準として定めていること、小学校5年生と中学校2年生を対象に通学距離とストレスとの関係を調べた研究によると、上記以内の通学距離であればストレスが大幅に増加することが認められなかったことなどから、当該距離を基準とすることに妥当性があると示しています。

(3) 通学区域

学校の適正配置を検討するに当たって、通学区域の見直しを進めるうえで、通学環境の安全確保は大変重要な課題になります。

現在、本市では、安全安心な通学路の確保に向けて、「藤沢市通学路交通安全プログラム」を策定し、危険箇所について庁内の関係部局をはじめ県の土木事務所や警察と合同点検を実施し、対策を講じるなど様々な取組を行っています。

そのため、通学区域の見直しを行う際には、安全な通学路の設定とあわせて、引き続き、通学路の安全点検、地域との連携による見守り活動の実施、子どもたちへの安全教育などの取組を総合的に実施し、安全安心な通学環境の整備を目指します。また、通学区域の設定に当たっては、次の事項を基本として検討します。

<通学区域設定に当たっての配慮事項>

- ・通学距離（時間）、通学の安全性を考慮する。
- ・境界を明確にするため、幹線道路、鉄道、河川、町丁目等で分ける。
- ・原則として自治会・町内会を分断しないようにする。
- ・13地区の行政区割について考慮する。
- ・指定校までの通学距離が小学校でおおむね2 km、中学校でおおむね3 kmの範囲を超える場合には、状況に応じた通学手段を柔軟に検討する。

4 学校適正規模・適正配置を検討する際の留意点

学校の規模及び配置の適正化については、将来的な児童生徒数や学級数の推移を見据え、周辺校を含めた学校規模や施設、通学距離に問題がないことに加え、子どもたちの生活や、地域と学校との関わりを子どもたちの目線に立って、十分に考慮したうえで、通学区域の見直しや学校の統合、時限的な分校の設置、小中一貫型小学校・中学校の設置などの手法により検討していきます。

また、学校の統合等に当たっては、子どもたちにとって、より良い教育環境を整えるとともに、長期的な学校施設の維持管理の視点から、統合校の校舎及び屋内運動場の規模、老朽化等の状況により、校舎の建て替え、大規模改修及び長寿命化改修についても同時に検討します。

検討する際の留意点については、次のとおり定めます。

(1) 学校規模

原則として行政区割の13地区を基本とし、地区内における学校同士を適正配置の検討対象とします。なお、立地上、地区境にある学校については例外として、学校の状況等を踏まえて検討します。

具体的には、本市の適正規模の基準である1校あたり12～24学級に近づけられるよう、通学区域の見直しを含めた検討を行うこととします。これに向けて、まずは、喫緊の課題である31学級以上の過大規模校と11学級以下の小規模校の解消に努めることとし、25学級以上30学級以下の大規模校については、将来的な児童生徒数や学級数の推移を注視していくこととします。

(2) 通学距離

現在、本市においては、徒歩による通学を原則とし、小学校で片道おおむね2km以内、中学校ではおおむね3km以内としています。このことは、国が通学距離の基準として示している、小学校で片道おおむね4km以内、中学校で片道おおむね6km以内の基準内にあることから、本方針においても、引き続き、当該基準を維持していくこととします。

(3) 通学区域

過大規模校・小規模校への対応として、通学区域の見直しを行うことで解消できないか検討するとともに、現在、通学距離を考慮して通学区域の設定が行われているものの、必ずしも学校が区域内の中央に位置しているとは限らないことから、適正化を検討する際には、河川や町丁目等の地形、幹線道路や鉄道等の交通事情、子どもたちの生活、地域と学校との関わりを十分に考慮したうえで、通学区域の見直しを行うこととします。

また、小学校については、隣接する小学校間の距離が1 km以内で、将来的にどちらかの学校が適正規模を下回る場合が想定される場合、小学校間の統合を検討します。

なお、中学校については、市内にバランスよく配置されているため、中学校間の統合は原則実施しないこととします。

ただし、将来的に適正規模を下回る場合が想定される場合には、近隣にある中学校間での統合を検討します。

(4) 支援教育の推進

白浜養護学校の教室不足の解消及び特別支援学級の全校設置については、早期に課題解決が図れるよう学校の適正規模・適正配置の検討を行う中で取組を進めることとします。

また、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援として、不登校児童生徒を含めた全ての子どもたちが安心して教育を十分に受けられるよう、学校における環境の整備を図るという視点についても考慮します。

(5) 小中一貫教育の検討

隣接する小中学校間の距離が概ね1 km以内で、統合することで子どもたちの学びや育ち、地域等の課題が解決され、より良い教育を実現させるための効果的な手段となる場合が期待される場合は、施設一体型を基本とする小中一貫教育化を検討します。

その際には、小中一貫教育の導入がどのような意義を持つのか十分な検討を行い、保護者や地域住民への理解を求めるとともに、小中学校の教職員間で取組への共通認識が持てるよう、説明や協議等を行いながら進めます。

(6) 地域との連携

学校は、児童生徒の教育のための施設であるだけでなく、指定避難所としての防災機能や地域の交流の場等、様々な機能を持ち合わせており、地域コミュニティにおいて重要な役割を有しています。

また、本市が取り組んでいる学校・家庭・地域連携推進事業（三者連携ふじさわ）やコミュニティ・スクール（学校運営協議会）では、学校と地域が一体となって地域の子どもたちを育み、「地域とともにある学校づくり」を目指しています。

このことから、学校の適正規模・適正配置を検討する際は、学校が教育施設としてだけでなく、地域において重要な役割を有していることを考慮して検討するとともに、地域団体との協議を十分に重ね、地域の意見も取り入れながら進めます。

(7) 統合等を行う場合の検討事項

学校施設においても公共施設の一部であることから、「藤沢市公共施設再整備基本方針」及び「藤沢市学校施設再整備基本方針」における再整備の基本的な考え方にに基づき、統合等により学校施設を再整備する際には、教育施設として必要な機能を備えることを優先し、教育環境に配慮した上で、他の公共施設との複合化についても検討することとします。

また、統合等により生じた活用しない学校施設がある場合については、過大規模校の解消のため、引き続き、教育施設として活用する可能性も含め、その活用方法を、「藤沢市公共資産活用等検討委員会」などとも情報共有を図りながら地域と行政のニーズに合わせた活用を検討することとします。

5 学校適正規模・適正配置の取組方法

これまで本市においては、2011年（平成23年）に学校適正配置検討部会を設置し、児童生徒の推計及び大規模開発等を踏まえ、学校適正配置の検討を行ってきました。

その後、学習指導要領の改訂やGIGAスクール構想の発表、法改正による小学校における少人数学級の段階的实施など、教育環境は大きく変化を続けています。

今後、学校適正規模・適正配置の検討に当たっては、児童生徒数の推移や学校施設の老朽化対策、学習指導要領の改訂、GIGAスクール構想によるタブレット端末を用いた学習環境の整備など、様々な変化に対応する必要があります。

こうした状況に迅速に対応するため、令和2年度、教育委員会では、学校施設の適正規模・適正配置における基本的な考え方をまとめました。

この基本的な考え方をもとに、令和3年度に学識経験者や地域住民、保護者、学校関係者の代表等による検討委員会を立ち上げ、学校適正規模・適正配置に向けた取組として、本基本方針を策定し、今後は「実施計画」を策定します。

基本方針の策定及び「実施計画」の策定に当たっては、施設の老朽化対策のほか、財政負担の軽減を図るための視点も含めて検討します。

（1）基本方針の位置付け

基本方針は、藤沢市立学校適正規模・適正配置に向けた取組において、ふじさわ教育大綱をはじめ、本市における市政運営の総合指針、公共施設再整備プラン及び教育振興基本計画のほか、学校施設に関連する個別計画との整合を図りながら、本市が学校に関する適正な規模や配置と考える基準を示しています。

次代を担う藤沢の子どもたちにとって、より良い教育環境を整え、さらに充実した学校教育が実現できるよう、2040年（令和22年）を見据え、ソフト・ハードの両面から整備していくものです。

(2) 実施計画の策定と位置付け

基本方針に基づき、2022年度（令和4年度）から2023年度（令和5年度）にかけて、適正規模・適正配置の実現に向けた通学区域の見直しや学校の統合など、具体的な手法や学校名を明記した「藤沢市立学校適正規模・適正配置実施計画（素案）」作成し、パブリックコメントや市議会からの意見を踏まえて実施計画を策定します。

また、実施計画（素案）の段階で、検討対象校の地域住民に対し説明を行い、理解を得ながら地域ごとに検討を進めます。

実施計画の策定に当たっては、特に次の3点に配慮して検討を進めます。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①子どもたちのより良い教育環境を最善に考えた取組とする。②学校は地域コミュニティの核となっていることを考慮する。③学校関係者、保護者、地域との合意形成を構築する。 |
|---|

(3) 実施計画策定後の各地区における取組

実施計画における検討対象校では、地域ごとに学校関係者や保護者、地域住民で構成する「（仮称）地域別小中学校適正規模・適正配置検討協議会（以下「（仮称）地域別協議会」という。）を設置し、学校運営上の課題について、地域における合意形成を図りながら検討を進めます。

（仮称）地域別協議会で議論された事項は意見書として教育委員会に提出され、その後、検討委員会において意見書の内容を尊重しながら検討が行われ、その結果が教育委員会に報告されます。

教育委員会では、（仮称）地域別協議会からの意見書及び検討委員会の検討結果をもとに、通学区域の見直しや学校の統合などの方策を検討し、その結果を（仮称）地域別協議会に通知します。

具体的な方策が策定された後は、方策がより円滑に進むよう、学校関係者、保護者、地域住民により、在校生への配慮事項の協議や統合に向けての学校間の交流、事前準備の検討などを行う「（仮称）新校運営課題検討委員会」を設置し、統合等により新しい環境を迎える子どもたちの心のケアについても配慮します。

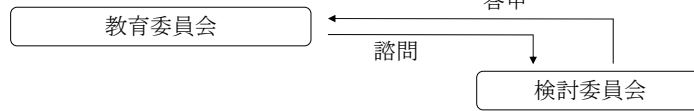
なお、（仮称）地域別協議会の検討により、合意が得られない場合、実施計画に明記した通学区域の見直しや統合などについては、改めて検討することとします。

【図1 今後のスケジュール】

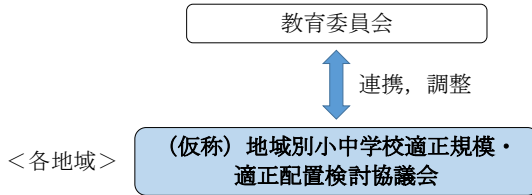
取組内容	計画期間								
	2020 R2	2021 R3	2022 R4	2023 R5	2024 R6	2025 R7	2026 R8	2027 R9	
藤沢市立学校 適正規模・適正配置に 関する基本方針		検討 ★策定 ・検討委員会の開催 ・議会報告 ・パブリックコメントの実施			方針は、国の施策や社会情勢の大きな変化により見直しの必要が生じた際に改訂				
藤沢市立学校 適正規模・適正配置 実施計画			検討 ★策定 ・検討委員会の開催 ・議会報告 ・パブリックコメントの実施 ・地域説明会の開催						
「(仮称)地域別協議会」 による検討					検討 ・(仮称)地域別協議会の開催 ・検討委員会の開催 ・議会報告				

【図2 今後の進め方】

① 「基本方針」及び「実施計画」の策定

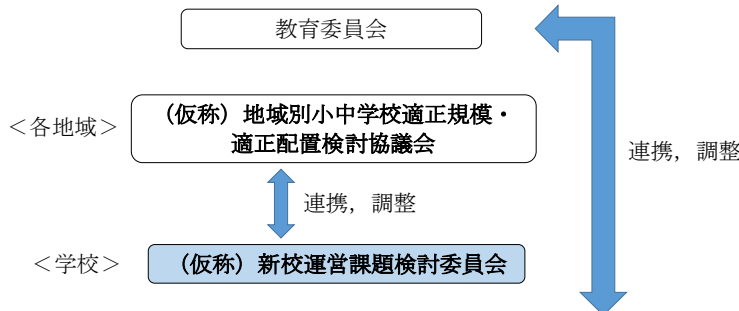


② 「実施計画」策定後の各地区での取り組み



※該当地区に(仮称)地域別小中学校適正規模・適正配置検討協議会を順次設置

③ 各学校での準備



※統合等が円滑に進めるよう各学校に(仮称)新校運営課題検討委員会を設置

(4) 基本方針等の見直し

「基本方針」及び「実施計画」については、国の施策の大幅な変更や社会情勢の変化が生じたとき、又は児童生徒推計に大幅な変化が生じたときは、改めて検討を行い、必要に応じて見直しを図ります。

参 考 資 料

	頁
1 学校規模に起因する特性	
(1) 学級数が少ないことによる学校運営上の特性	29
(2) 教職員が少なくなることによる学校運営上の特性	30
(3) 大規模校において考えられる学校運営上の特性	31
(4) 学校運営上の特性（前述(1)から(3)が児童生徒に与える影響）	32
2 学校一覧	33
3 学校の老朽化の状況	34
4 学校別児童生徒数の推移	35
5 各地区別資料	38
(片瀬地区, 鶴沼地区, 辻堂地区, 村岡地区, 藤沢地区, 明治地区, 善行地区, 湘南大庭地区, 六会地区, 湘南台地区, 遠藤地区, 長後地区, 御所見地区)	
1 将来人口推計	
2 地区内の学校の状況	
(1) 学級数の推移	
(2) 学校位置図	
【参考】 1 校舎等の状況	
2 通学距離	
3 道路, 交通, 土地利用状況	
4 自治会・町内会	
5 指定避難所・指定緊急避難場所	

1 学校規模に起因する特性

(1) 学級数が少ないことによる学校運営上の特性

<メリット>

- ・児童生徒の一人ひとりに目がとどきやすく、きめ細かな支援・指導が行いやすい。
- ・学校行事や部活動等において、児童生徒の個別の活動機会を設定しやすい。
- ・児童生徒相互の人間関係が深まりやすい。
- ・学校が一体となって活動しやすく、異学年間の交流も生まれやすい。
- ・特別教室、体育館などの利用時間等の調整が行いやすい。
- ・災害発生等による緊急避難時に混雑が生じにくい。
- ・空き教室があれば有効活用できる。

<デメリット>

- ・児童生徒間の多様な考えに触れる機会など、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。
- ・体育的、文化的行事などの集団活動に制約が生じやすい。
- ・クラス替えがしにくく、人間関係が固定化しやすい。
- ・組織的な体制が組みにくく、指導方法等に制約が生じやすい。
- ・学校全体の活性化が図りにくい。

(2) 教職員が少なくなることによる学校運営上の特性

<メリット>

- ・全教職員間の意思疎通が図りやすく，相互の連携が密になりやすい。
- ・学校が一体となって活動しやすい。
- ・施設・設備の利用時間等の調整が行いやすい。
- ・教職員相互に仕事ぶりがよく見える。

<デメリット>

- ・年齢，教職経験，教科，特性などの面でバランスのとれた教職員配置をしにくい。
- ・学年別や教科別の教職員同士で，相談・研究・協力等が行いにくい。
- ・顧問の人材確保などが難しく，中学校の部活動が限定される。
- ・一人に複数の校務分掌が集中しやすい。
- ・出張，研修等の調整が難しい。
- ・少人数学習や小学校の専科教員による指導など，多様な学習・指導形態をとりにくい。
- ・中学校の授業時間数の少ない教科では本務者の配置が難しい。
- ・職員が療養休暇等に入ってしまった場合など，職員の補填がきかない。

(3) 大規模校において考えられる学校運営上の特性

<メリット>

- ・ 集団の中で、多様な考え方に触れ、切磋琢磨しやすい。
- ・ 体育的、文化的行事などの集団活動に活気が生じやすい。
- ・ 児童・生徒数、教職員数が多いため、少人数学習や小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりやすい。
- ・ 様々な種類の部活動等の設置が可能となる。
- ・ 学校全体での組織的な指導体制が組みやすい。
- ・ P T A活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。
- ・ 大規模校では、児童生徒数や学級数に応じた教職員数の加配がある。
- ・ 校務分掌を分担して、複数人で対応することができる。

<デメリット>

- ・ 全教職員による児童生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。
- ・ 学校行事等において、一人ひとりの個別の活動機会を設定しにくい。
- ・ 学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。
- ・ 教職員相互の連絡調整が図りづらい。
- ・ 特別教室や体育館等の利用調整がしづらい。
- ・ 全体がまとまるまでに時間がかかる。
- ・ 児童生徒が多ければ、それだけ様々な個性、特性を持つ子どもも多く、支援に手間や時間を多く要する。事故やトラブルが起こる割合も高くなる。
- ・ 児童生徒数や教職員数が多くなっても、管理職の数は変わらないため、多種多様な対応が必要となり、管理職の負担が大きい。
- ・ 校外行事や校外学習等の場所が限定されることがある。
- ・ 学級数が多いと、運動会や卒業式などの行事において、学年全体での動きがとりづらい。健康診断や避難訓練などにも時間がかかる。
- ・ 登下校時の安全確保が難しい。地域によっては交差点が子どもたちであふれかえり、地域からのクレームにもつながる。
- ・ 体育館に全校の児童生徒が収容できない。
- ・ 小学校など、休み時間の校庭に多くの子どもたちが遊んでおり、けがも多い。
- ・ 学級数が多く教室配置が学年で揃えられないと、1クラスだけ異なるフロアや棟になるとがあり、学年のまとまりがとりづらい。

(4) 学校運営上の特性(前述(1)から(3))が児童生徒に与える影響)

<小規模校>

- きめ細かな指導が可能→心身の健やかな成長、資質や能力が伸長する。
- 個別の活動の機会→活動の満足度が高く、自己肯定感も高まる。
- 安心感をもって落ち着いた学校生活が送れる。
- 個々の児童生徒の状況を把握しやすく、個に応じた指導やきめ細かな支援を行いやすい。
- 切磋琢磨する機会が少ない。
- 人間関係の固定化→マイナス面の改善が困難となる。
- クラス替えなども難しく、児童生徒の人間関係が固定化しやすい。

<大規模校>

- 集団での切磋琢磨→社会性やたくましさ等を育みやすい。
- クラス替え→豊かな人間関係の構築、多様な集団の形成が可能となる。
- 様々な人との出会い→多様な考え方に出会い成長できる。
- 多くの教職員が関わることで、多面的に子どもを見ることができる。
- 多様な人間関係を構築する機会が多い。
- 教職員数、児童生徒数が多いため、多様な学習・指導形態が可能となる。
- 特別教室や体育館等の利用調整がしづらい。
- 校外行事や校外学習等の場所以が限定されることがある。
- 個別の活動の機会が少ない、個の発表の機会が少ない→自己肯定感、自己有用感を育む機会が少ない。
- 全校単位、学年単位での活動に制約がかかる→活動機会が狭まる。
- 子ども同士の事故やトラブルが多くなる。

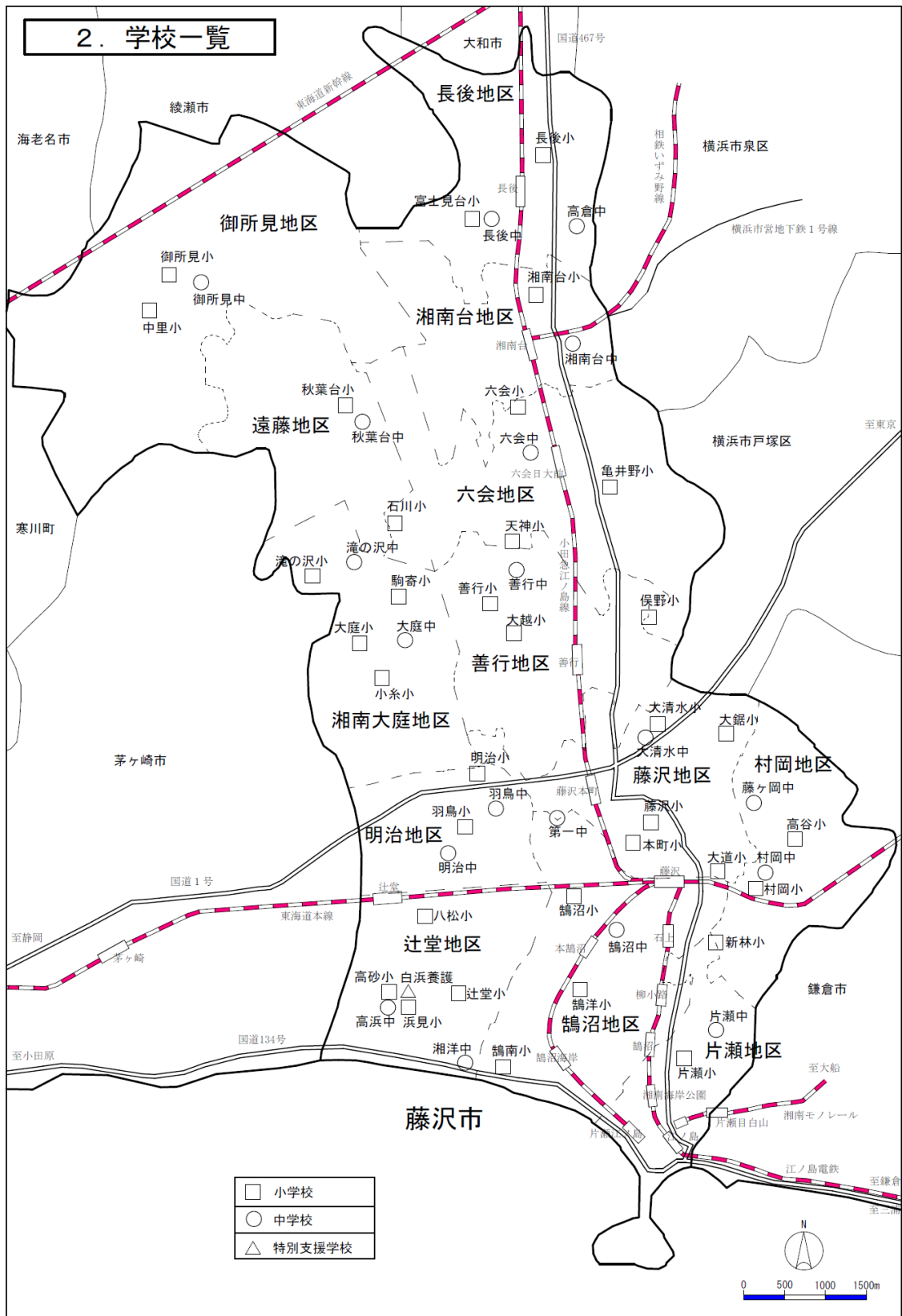
※令和2年度藤沢市学校適正配置検討部会調査より

(参考文献)

「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」

(平成27年1月27日 文部科学省)

2 学校一覧



3 学校の老朽化の状況

令和3年4月1日現在

学校名	校舎 建設年度	使用 年数	屋内運動場 建設年度	使用 年数	再整備 計画
藤沢小	1968	53年	1990	31年	有
明治小	1967	54年	1987	34年	有
鵜沼小	1967	54年	1965	56年	有
本町小	2011	10年	1972	49年	
村岡小	1969	52年	1967	54年	
六会小	1999	22年	1999	22年	
辻堂小	1968	53年	1965	56年	有
鵜洋小	1959	62年	1964	57年	有
片瀬小	1963	58年	1968	53年	有
大道小	1967	54年	1966	55年	有
秋葉台小	1964	57年	1969	52年	
御所見小	1971	50年	1968	53年	
長後小	1966	55年	1968	53年	有
八松小	1967	54年	1966	55年	
高砂小	1995	26年	1995	26年	
善行小	2009	12年	2009	12年	
富士見台小	1966	55年	1970	51年	
鵜南小	1969	52年	1971	50年	有
浜見小	1969	52年	1973	48年	
俣野小	1970	51年	1974	47年	
大越小	1970	51年	1973	48年	
羽鳥小	1971	50年	1974	47年	
湘南台小	1972	49年	1974	47年	
大庭小	1975	46年	1975	46年	
亀井野小	1976	45年	1976	45年	
新林小	1977	44年	1977	44年	
中里小	1977	44年	1977	44年	
滝の沢小	1978	43年	1978	43年	
大鋸小	1979	42年	1979	42年	
天神小	1980	41年	1980	41年	
駒寄小	1980	41年	1980	41年	
高谷小	1981	40年	1981	40年	
小糸小	1981	40年	1981	40年	
大清水小	1982	39年	1982	39年	
石川小	1993	28年	1993	28年	

学校名	校舎 建設年度	使用 年数	屋内運動場 建設年度	使用 年数	再整備 計画
第一中	2008	13年	2008	13年	
明治中	1969	52年	1998	23年	有
鵜沼中	1969	52年	1992	29年	有
六会中	2009	12年	2019	2年	
片瀬中	2003	18年	2003	18年	
御所見中	1970	51年	1966	55年	
湘洋中	1989	32年	1989	32年	
長後中	1993	28年	1993	28年	
藤ヶ岡中	2000	21年	2000	21年	
高浜中	1972	49年	1973	48年	
善行中	1975	46年	1975	46年	
秋葉台中	1975	46年	1975	46年	
大庭中	1978	43年	1978	43年	
村岡中	1979	42年	1979	42年	
湘南台中	1980	41年	1980	41年	
高倉中	1981	40年	1981	40年	
滝の沢中	1981	40年	1981	40年	
大清水中	1983	38年	1983	38年	
羽鳥中	1985	36年	1985	36年	
白浜養護	1997	24年	1997	24年	有

4 学校別児童生徒数の推移

<小学校>

(人)

学校名	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
	R2	R7	R12	R17	R22
藤沢小学校	588	557	513	494	511
明治小学校	871	925	880	863	855
鵜沼小学校	867	963	863	800	787
本町小学校	804	709	633	610	630
村岡小学校	538	552	495	495	526
六会小学校	993	954	888	873	904
辻堂小学校	1,225	1,236	1,098	1,089	1,114
鵜洋小学校	1,184	1,086	954	886	871
片瀬小学校	764	631	513	469	464
大道小学校	647	718	674	650	671
秋葉台小学校	666	561	618	730	699
御所見小学校	471	344	291	267	260
長後小学校	887	802	757	727	736
八松小学校	711	738	712	708	724
高砂小学校	537	659	623	619	633
善行小学校	447	437	402	374	367
富士見台小学校	679	620	553	532	539
鵜南小学校	551	514	454	422	416
浜見小学校	407	283	256	256	264
俣野小学校	310	306	294	273	269
大越小学校	644	549	454	421	414
羽鳥小学校	984	854	716	689	711
湘南台小学校	792	792	742	721	710
大庭小学校	489	416	351	318	302
亀井野小学校	656	654	597	588	609
新林小学校	579	767	715	712	755
中里小学校	326	234	205	188	184
滝の沢小学校	613	465	349	316	300
大鋸小学校	774	744	626	603	623
天神小学校	536	434	415	410	427
駒寄小学校	521	426	337	305	291
高谷小学校	906	789	674	671	712
小系小学校	291	258	211	193	184
大清水小学校	336	310	290	282	293
石川小学校	640	655	571	562	583
合計	23,234	21,942	19,724	19,116	19,338

<中学校>

(人)

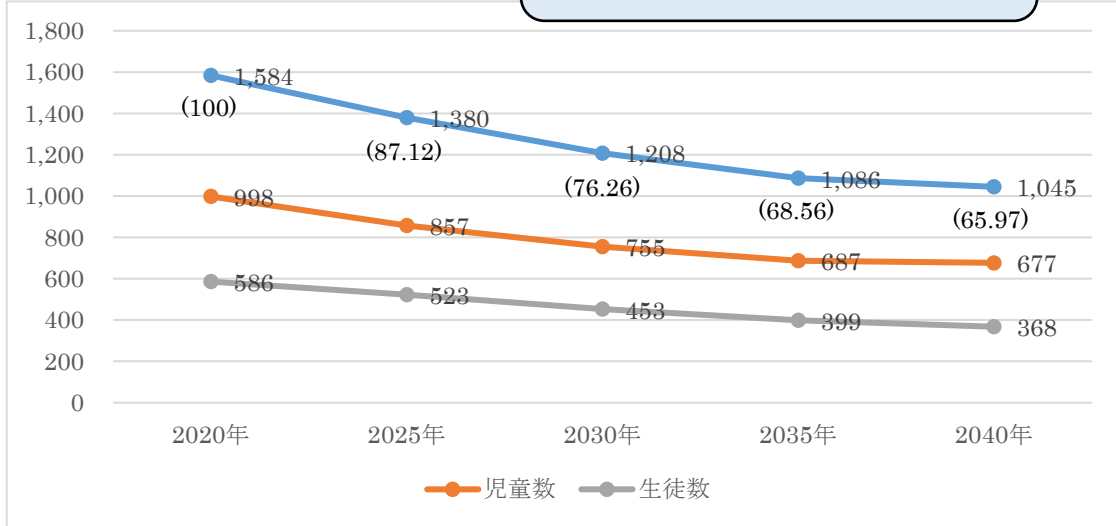
学校名	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
	R2	R7	R12	R17	R22
第一中学校	707	735	646	583	575
明治中学校	619	743	810	769	752
鵜沼中学校	806	913	894	746	701
六会中学校	764	752	666	576	574
片瀬中学校	478	366	305	243	226
御所見中学校	410	383	282	198	184
湘洋中学校	791	833	769	639	635
長後中学校	355	385	345	282	276
藤ヶ岡中学校	697	816	733	643	658
高浜中学校	421	436	415	380	379
善行中学校	378	370	395	338	317
秋葉台中学校	429	333	303	317	373
大庭中学校	554	513	422	320	295
村岡中学校	620	748	795	771	785
湘南台中学校	574	572	610	596	576
高倉中学校	434	379	361	327	320
滝の沢中学校	707	653	547	462	425
大清水中学校	290	325	303	259	257
羽鳥中学校	524	478	349	290	285
合計	10,558	10,733	9,950	8,739	8,593

5 各地区別資料

片瀬地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計（児童・生徒・合計）



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	20,022	19,795	19,434	19,001	18,525
2020年比(%)	(100)	(98.9)	(97.1)	(94.9)	(92.5)

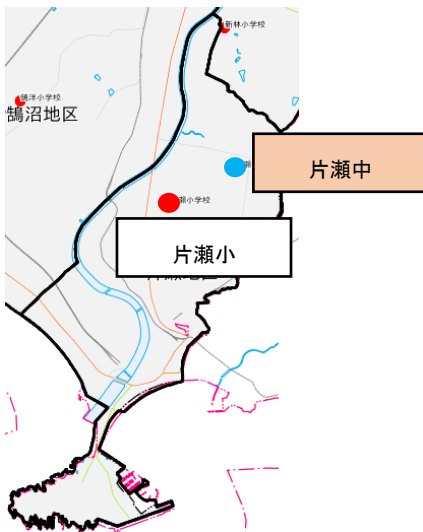
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
片瀬小	27	23	18	18		
片瀬中	18	12	10	6	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

・片瀬小学校－片瀬中学校：約600m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
片瀬小学校	12,487	5,183	626	58	仮設校舎1棟(3教室)
片瀬中学校	22,407	7,452	2,356	18	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には片瀬小学校が設置されており、片瀬小学校の通学区域は東西に約2.2km、南北に約3.0kmとなっている。通学距離においては約2.5kmが最長距離となっている。

<中学校>

- ・本地区には、片瀬中学校が設置されており、片瀬中学校の通学区域は東西に約2.0km、南北に約3.0kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・道路、交通状況を見ると、都市計画道路の横浜藤沢線が未整備となっており、居住地域では狭隘道路も多くなっている。また、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・片瀬山周辺と沿岸部では高低差があり、それぞれに低層住宅地が広がっている。沿岸部の国道134号や国道467号沿いでは中高層住宅の立地がみられる。
- ・今後の土地利用状況においては、片瀬江ノ島駅周辺等の高層マンション計画も少しずつ進んでいることから、状況把握が必要である。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、新屋敷第一町内会において、新林小学校と片瀬小学校に通学区域が分かれている区域がある。

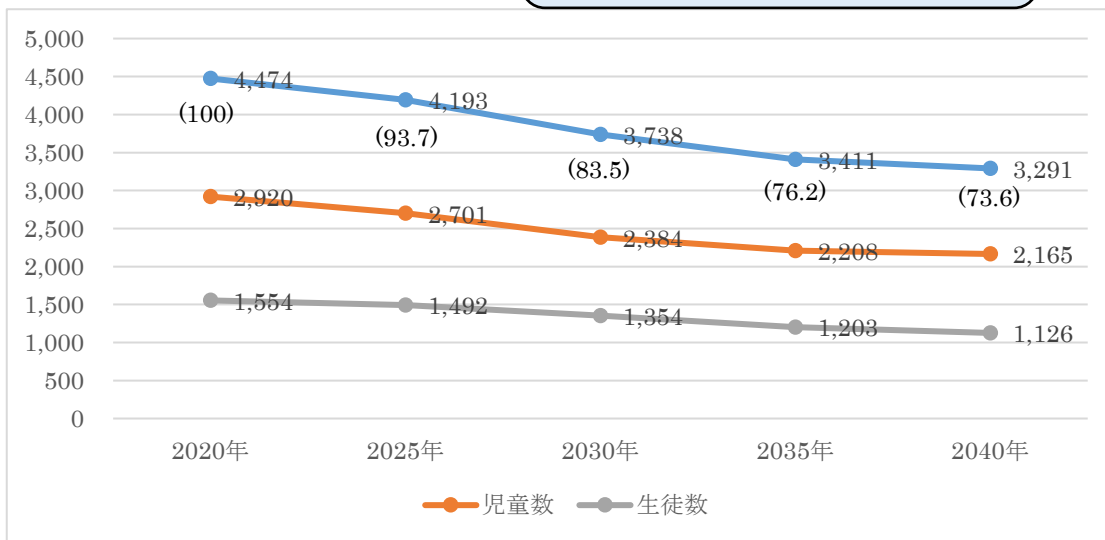
5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
片瀬小学校	○		○		○
片瀬中学校	○		○	○	

鵜沼地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	56,626	57,107	56,808	56,257	55,556
2020年比(%)	(100)	(100.8)	(100.3)	(99.3)	(98.1)

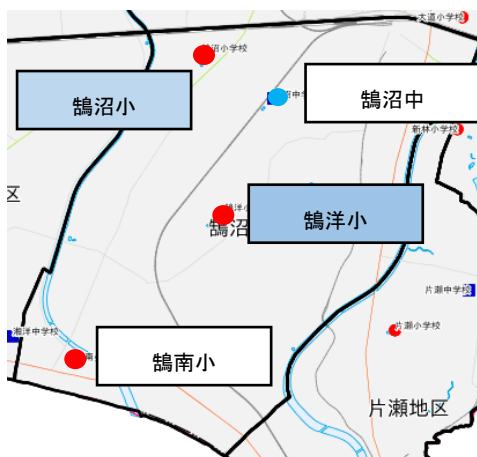
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
鵜沼小	31	27	30	30	大規模	
鵜沼中	28	22	25	18		
鵜洋小	36	35	30	30	大規模	
鵜南小	18	18	18	18		

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

- ・鵜沼小学校－鵜沼中学校
- : 約600m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
鵜沼小学校	12,212	5,702	621	54	
鵜洋小学校	17,420	5,822	632	62	仮設校舎3棟(8教室)
鵜南小学校	10,908	4,557	633	52	改築工事中(～R6)
鵜沼中学校	21,327	6,504	1,465	52	H4 屋内運動場改築 仮設校舎1棟(4教室)

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には鵜沼小学校・鵜洋小学校・鵜南小学校と3つの学校が設置されており、鵜沼小学校の通学区域は東西に約2.0km、南北に2.2km、鵜洋小学校は東西に2.2km、南北に2.2km、鵜南小学校は東西に1.2km、南北に2.1kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、鵜沼中学校が設置されており、鵜沼中学校の通学区域は東西に約2.3km、南北に約2.1kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・道路、交通状況においては、鵜沼小学校の学区において、通学路の中でJRの踏切を渡り通学しなければならない箇所がある。
- ・狭隘道路や行き止まり道路も多く生活道路が不十分であるとともに、近年の宅地細分化により更に地震災害等への危険度が高まっている。さらに、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・全体的に低層住宅地が形成されている。藤沢駅周辺や国道134号線沿道には中高層住宅の立地がみられる。また、藤沢駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども可能な地域となっている。
- ・今後の土地利用状況においては、藤沢駅の南側商業地域を中心とした大型・高層マンション計画が進んでいるため、状況把握が必要である。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、花沢町1丁目町内会において、大道小学校と鵜沼小学校、原町内会・ひさご会・新樹会において鵜沼小学校と鵜洋小学校に通学区域が分かれている区域がある。

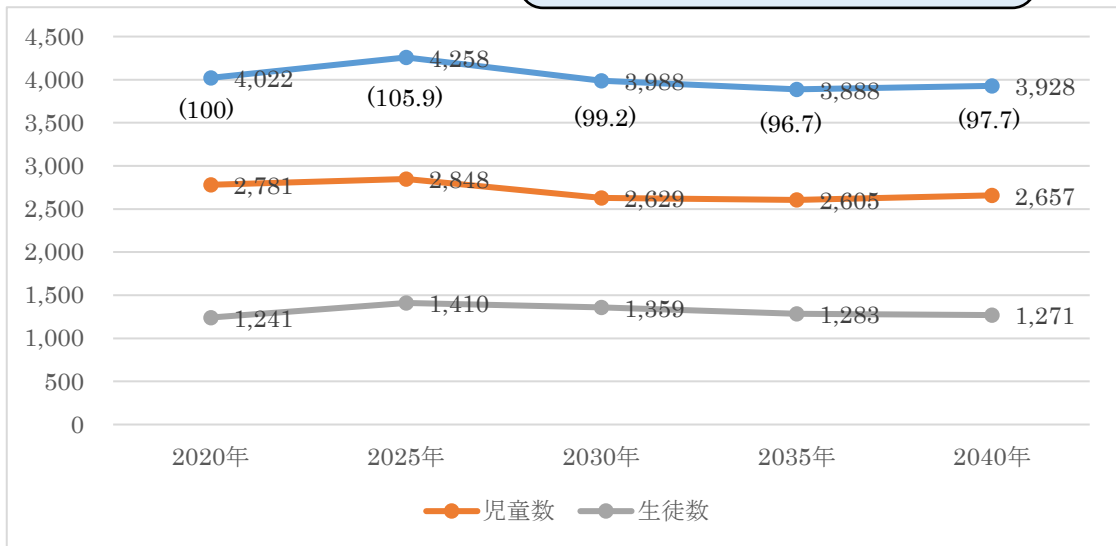
5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
鵜沼小学校	○		○		
鵜洋小学校	○		○		
鵜南小学校	○		○		
鵜沼中学校	○		○		

辻堂地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	42,316	43,369	43,229	43,116	43,047
2020年比(%)	(100)	(102.5)	(102.2)	(101.9)	(101.7)

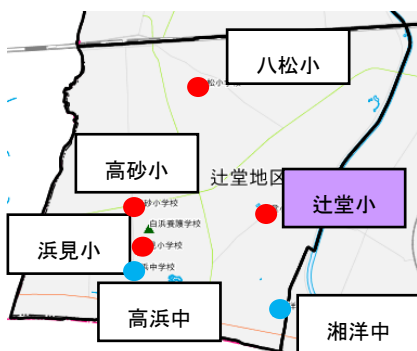
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
辻堂小	37	35	30	36	過大規模	
八松小	23	23	24	24		
高砂小	19	18	18	24		
浜見小	16	12	12	12		
湘洋中	28	21	21	18		
高浜中	16	12	12	12		

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、
仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

＜隣接する小中学校間の距離＞

- ・浜見小学校－高浜中学校：約100m
- ・辻堂小学校－湘洋中学校：約700m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
辻堂小学校	19,882	6,030	645	53	仮設校舎2棟(9教室)
八松小学校	14,001	4,813	633	54	仮設校舎1棟(2教室)
高砂小学校	16,173	5,769	963	26	
浜見小学校	14,609	4,405	645	52	
湘洋中学校	24,366	7,293	1,219	32	H28増築(5教室)
高浜中学校	14,943	4,878	785	49	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には辻堂小学校・八松小学校・高砂小学校・浜見小学校と4つの学校が設置されており、辻堂小学校の通学区域は東西に約1.6km、南北に約2.2km、八松小学校の通学区域は東西に約2.4km、南北に約1.5km、高砂小学校は東西に約1.4km、南北に約1.1km、浜見小学校は東西に約1.5km、南北に約1.0kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、湘洋中学校と高浜中学校が設置されており、湘洋中学校の通学区域は東西に約2.6km、南北に約3.0km、高浜中学校は東西に1.4km、南北に1.5kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・辻堂地区では、未整備の都市計画道路が多く、特に東西方向などのネットワークが不十分となっている。また、地域では、狭隘道路も多く、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・全体的に低層住宅地が形成されている。地区の南西部の湘南海岸公園周辺には比較的建築年数が古い辻堂団地のほか、比較的新しい中層住宅を含む共同住宅群が形成されている。また、辻堂駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども可能な地域となっているため、状況把握が必要である。

4 自治会・町内会

- 自治会との関係では、辻堂新町町内会において、八松小学校と明治小学校、打越会において羽鳥小学校と八松小学校、桜花園自治会において八松小学校と高砂小学校、辻堂北町町内会と辻堂西町町内会において八松小学校と辻堂小学校、辻堂南海岸町内会において高砂小学校と浜見小学校、辻堂団地自治会において高砂小学校と浜見小学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

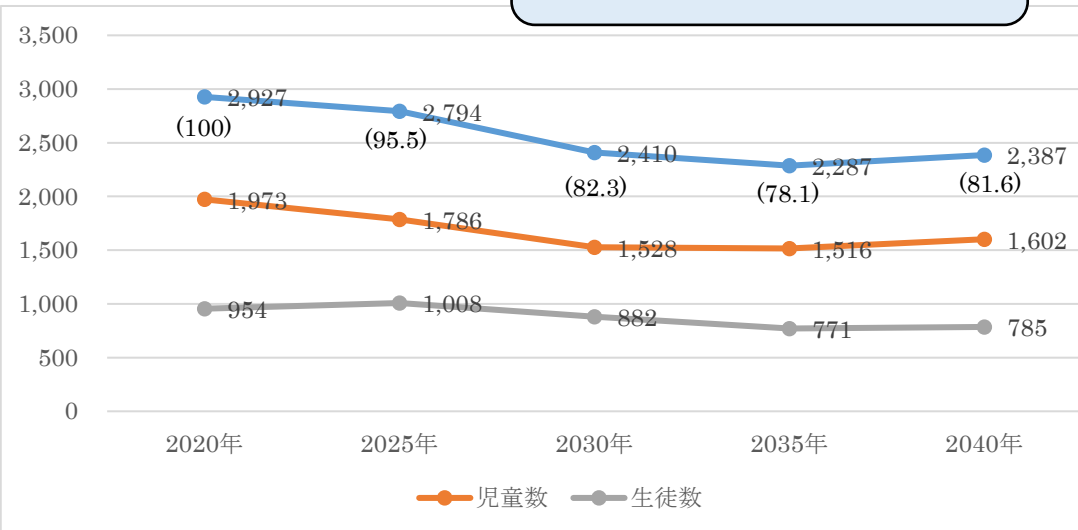
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
辻堂小学校	○		○		
八松小学校	○		○		
高砂小学校	○			○(注)	○
浜見小学校	○			○(注)	
湘洋中学校	○		○		○
高浜中学校	○		○	○(注)	

(注)「湘南工科大学(周辺)」として指定

村岡地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	30,834	31,298	32,034	32,520	32,942
2020年比(%)	(100)	(101.5)	(103.9)	(105.5)	(106.8)

※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
村岡小	20	18	18	18		
新林小	25	18	24	24		
高谷小	28	25	24	24		大規模→適正
藤ヶ岡中	21	20	19	15		
村岡中	19	16	21	21		

(2) 学校位置図



注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

- ・高谷小学校－藤ヶ岡中学校：約600m
- ・村岡小学校－村岡中学校：約200m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
村岡小学校	11,137	4,832	631	50	
新林小学校	12,435	4,826	648	42	
高谷小学校	14,868	4,747	678	38	仮設校舎1棟(4教室)
藤ヶ岡中学校	30,164	8,164	2,129	20	
村岡中学校	17,719	6,688	804	40	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、村岡小学校・新林小学校・高谷小学校と3つの学校が設置されており、村岡小学校の通学区域は東西に約2.1km、南北に約2.1km、新林小学校は東西に1.8km、南北に約1.8km、高谷小学校は東西に約2.0km、南北は約1.4kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、藤ヶ岡中学校と村岡中学校が設置されており、藤ヶ岡中学校の通学区域は東西に約2.3km、南北に約1.8km、村岡中学校は東西に約2.8km、南北に約2.3kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・地区の骨格となる道路網は、「かながわのみちづくり計画」において交流幹線道路として位置づけられている横浜藤沢線が地区南側で未整備となっていますが、それ以外は概ね整備を終えています。
- ・地区の中央にはJR東海道線が横断しており、南北に通行できる箇所が限られている。
- ・鉄道沿線や地区の南部には工業地と住宅地が分布しており、住宅地には中高層住宅と低層住宅が混在している。地区の北部は、土地区画整理事業により低層住宅地が広く形成されている。
- ・今後の土地利用状況においては、新たな村岡新駅を中心としたまちづくりが進むため、中高層が許容されている地域における土地利用の転換や人口増等の動向を注視する必要がある。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、新屋敷第一町内会において、新林小学校と片瀬小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、新西富自治会において、大清水中学校と藤ヶ岡中学校、舟久保町内会・天嶽院下自治会・渡内西町内会・渡内町内会・御幣山自治会において、村岡中学校と藤ヶ岡中学校、喜楽町町内会においては、村岡中学校と第一中学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
村岡小学校	○		○		
新林小学校	○		○	○ (注1)	
高谷小学校	○		○	○ (注2)	
藤ヶ岡中学校	○		○	○	
村岡中学校	○		○		

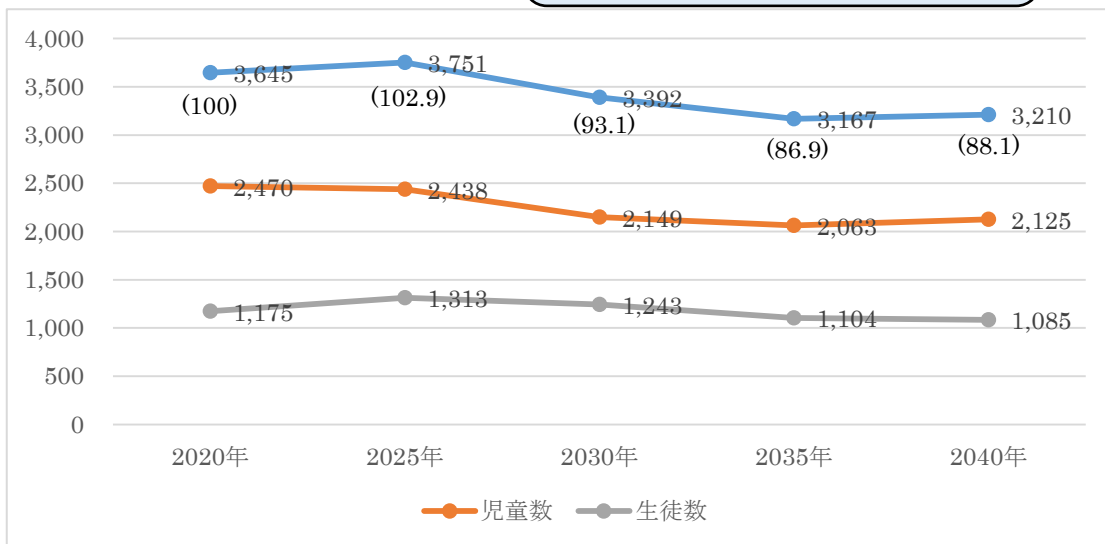
(注1)「新林公園周辺(新林小含む)」として指定

(注2)「高谷小学校周辺(高谷公園・天嶽院含む)」として指定

藤沢地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	46,202	46,822	47,370	47,877	48,224
2020年比(%)	(100)	(101.3)	(102.5)	(103.6)	(104.4)

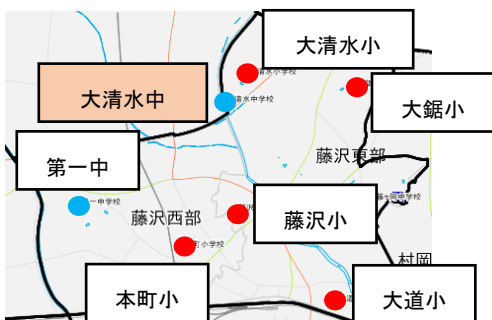
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
藤沢小	20	19	18	18		
本町小	25	25	18	18		大規模→適正
大道小	23	20	24	24		
大鋸小	24	24	18	18		
大清水小	14	12	12	12		
第一中	21	20	18	15		
大清水中	15	9	9	9	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

- ・大清水小学校－大清水中学校：約200m
- ・本町小学校－第一中学校：約800m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
藤沢小学校	20,087	4,467	1,255	53	H2 屋内運動場改築
本町小学校	17,002	6,884	636	10	屋体築 49 年
大道小学校	16,549	5,610	632	54	H6 増築(管理諸室棟)
大鋸小学校	15,039	4,278	652	42	仮設校舎 2 棟(5 教室)
大清水小学校	14,000	3,891	652	39	
第一中学校	26,709	7,818	1,271	13	
大清水中学校	19,323	5,268	804	38	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、藤沢小学校・本町小学校・大道小学校・大鋸小学校と 5 つの学校が設置されており、藤沢小学校の通学区域は東西に約 1.5 km、南北に約 1.7 km、本町小学校は東西に約 1.7 km、南北に約 2.2 km、大道小学校は東西に約 1.3 km、南北は約 1.3 km、大鋸小学校は東西に約 1.7 km、南北は約 1.1 km、大清水小学校は東西に約 1.7 km、南北に約 1.0 km となっている。

<中学校>

- ・本地区には、第一中学校と大清水中学校が設置されており、第一中学校の通学区域は東西に約 1.8 km、南北に約 2.7 km、大清水中学校は東西に約 1.7 km、南北に約 3.3 km となっている。

3 道路, 交通, 土地利用状況

- 本地区は13地区内の中で最も小学校が設置されている地区で各学校間の距離が接近している。藤沢駅周辺の国道467号などでは, 交通渋滞が発生しており, 通学の時間帯に交通量が多くなっており, 一部では狭隘道路も多くなっている。
- 地区内には線路や河川があり, 横断できる箇所が限られている。
- 藤沢駅周辺は都市拠点として高層マンションなども立地が可能な区域となっており, 中心市街地では立地がみられる。一方で中心市街から少し離れた縁辺部では古い戸建て住宅の混在もみられる。
- 地区の東側は, 土地区画整理事業等により低層住宅地が広く形成されているほか, 一部では大規模な高層住宅が再整備されている。
- 今後の土地利用状況においては, 藤沢駅の北側商業地域を中心とした高層マンション計画も少しずつ進んでいる。また, 本地区西側の端に位置する日本電気硝子工場跡地の土地利用が進むため, 注視する必要がある。

4 自治会・町内会

- 自治会との関係では, 柄沢町内会において, 大鋸小学校と高谷小学校と村岡小学校, 南仲通四丁目町内会において藤沢小学校と本町小学校, 船久保町内会に藤沢小学校と大道小学校, 相生町町内会に藤沢小学校と本町小学校, 喜楽町町内会に藤沢小学校と大道小学校, 花沢町1丁目町内会に大道小学校と鶴沼小学校, 日の出町自治会に大道小学校と新林小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- 自治会との関係では, 新西富自治会において, 大清水中学校と藤ヶ岡中学校, 喜楽町町内会において, 第一中学校と村岡中学校に, 西俣野中自治会において, 六会中学校と大清水中学校に分かれる。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

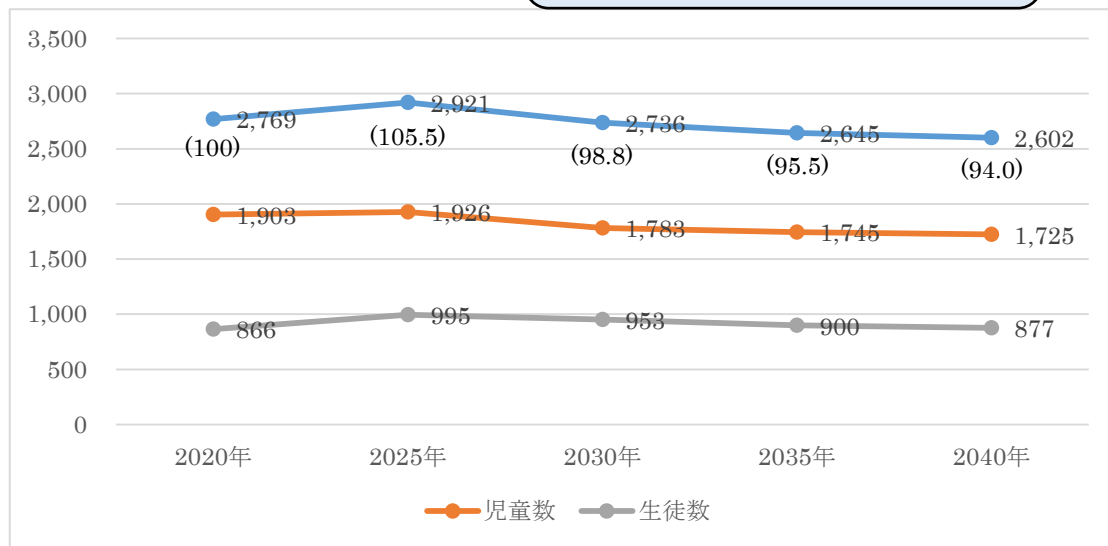
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
藤沢小学校	○		○		
本町小学校	○		○		
大道小学校	○		○		
大鋸小学校	○		○		
大清水小学校	○				
第一中学校	○		○	○(注)	
大清水中学校	○				

(注)「県立湘南高等学校(周辺)」として指定

明治地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計（児童・生徒・合計）



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	30,695	32,771	33,367	33,826	34,156
2020年比(%)	(100)	(106.8)	(108.7)	(110.2)	(111.3)

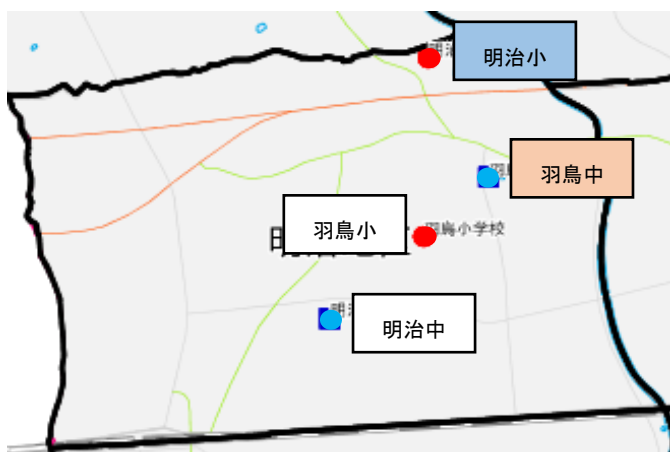
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
明治小	31	24	30	30	大規模	
羽鳥小	30	30	24	24		大規模→適正
明治中	20	18	22	21		
羽鳥中	18	15	11	9	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

・明治小学校－羽鳥中学校

：約500m

・羽鳥小学校－明治中学校

：約400m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
明治小学校	20,881	6,017	1,038	54	S62 屋内運動場改築 仮設校舎1棟 (4教室)
羽鳥小学校	13,350	4,566	628	50	仮設校舎1棟 (6教室)
明治中学校	16,541	5,368	1,744	52	H10 屋内運動場改築
羽鳥中学校	16,387	5,580	1,282	36	仮設校舎1棟 (4教室)

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、明治小学校・羽鳥小学校と2つの学校が設置されており、明治小学校の通学区域は東西に約2.5km、南北に約2.3km、羽鳥小学校は東西に約1.4km、南北に約0.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、明治中学校と羽鳥中学校が設置されており、明治中学校の通学区域は東西に約2.4km、南北に約3.5km、羽鳥中学校は東西に約2.1km、南北に約2.3kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、明治地区は、藤沢市内でも整備が完了している都市計画道路が多い地区であるが、横浜湘南道路、県道43号（藤沢厚木）などが未整備となっている。
- ・辻堂駅北口の大規模工場跡地の再整備に伴い、駅周辺には大規模な高層住宅が立地している。また、駅周辺の再整備により地区の魅力が高まったことで、周辺における大型マンションの立地もみられる。
- ・東海道線沿線では、工業系から商業施設や中高層住宅への土地利用転換が進んでいる。
- ・その他の地域でも低層・中高層の住宅がともに広く分布している。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では，辻堂新町町内会において，明治小学校と八松小学校と羽鳥小学校，打越会では羽鳥小学校と八松小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では，羽鳥向町内会・共和自治会において，羽鳥中学校と明治中学校に通学区域が分かれている区域がある。

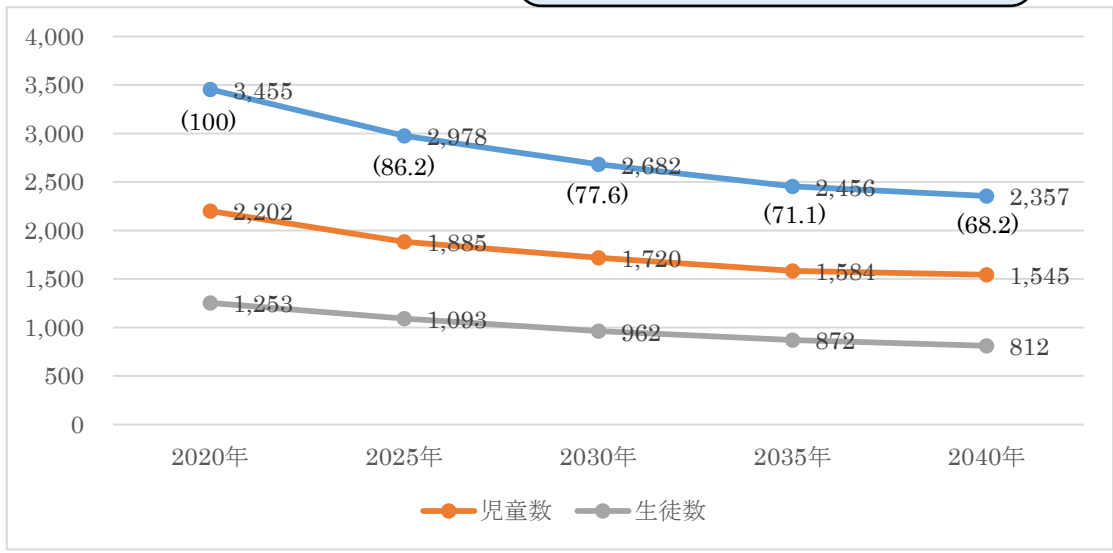
5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
明治小学校	○		○		
羽鳥小学校	○				
明治中学校	○				
羽鳥中学校	○		○		

善行地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	42,371	42,020	41,355	40,439	39,371
2020年比(%)	(100)	(99.2)	(97.6)	(95.4)	(92.9)

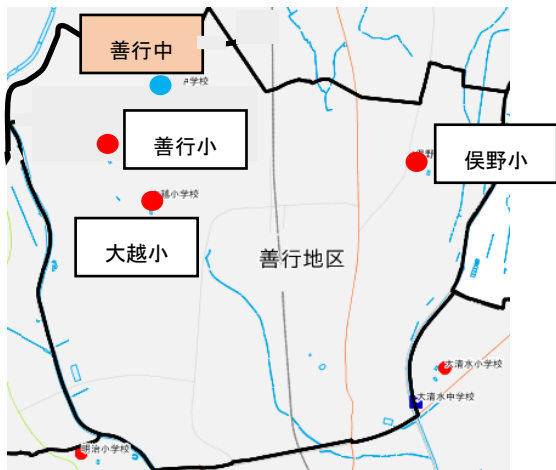
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
善行小	17	13	12	12		
俣野小	18	12	12	12		
大越小	22	19	18	12		
善行中	22	12	12	9	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>
・善行小学校－善行中学校
: 約500m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
善行小学校	15,321	6,175	1,040	12	
俣野小学校	16,312	5,115	633	51	
大越小学校	15,548	4,943	792	51	
善行中学校	16,529	6,184	653	46	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、善行小学校・大越小学校と2つの学校が設置されており、善行小学校の通学区域は東西に約1.7km、南北に約2.6km、大越小学校は東西に約1.0km、南北は約1.7kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、善行中学校が設置されており、通学区域は東西に約2.0km、南北に約2.0kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、都市計画道路の整備は、藤沢石川線の一部区間を残して、概ね完了している。また、地域東側、西側の一部の地域には、狭隘道路なども多くなっている。
- ・地区の東西には境川と引地川が流れており、その周辺は市街化調整区域となっている。
- ・地区を縦断するように小田急江ノ島線が位置しているとともに、地区の中央から南部にかけて県立体育センターや大規模な教育施設等が立地していることから、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の北西部の大規模な善行団地や国道467号線東側の県営住宅など、昭和40年代の土地区画整理事業や民間宅地開発より団地が整備されており、多くの住宅で更新時期を迎えつつある。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、善行団地自治会・大庭東町町内会・善行町内会において、善行小学校と大越小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、新田自治会において、六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

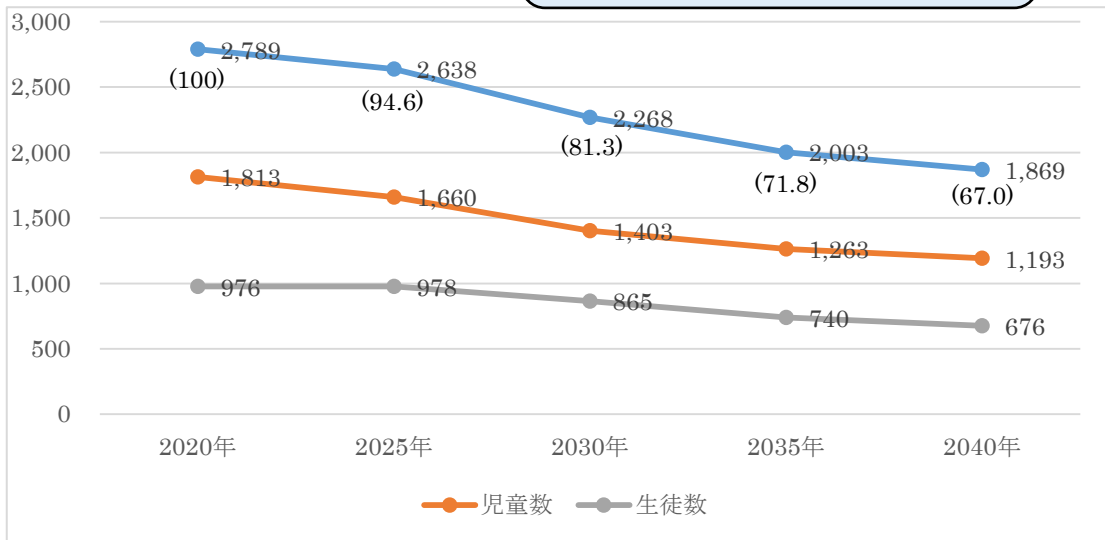
5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
善行小学校	○		○		
俣野小学校	○		○		
大越小学校	○		○		
善行中学校	○				

湘南大庭地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	32,705	32,748	32,351	31,465	30,189
2020年比(%)	(100)	(100.1)	(98.9)	(96.2)	(92.3)

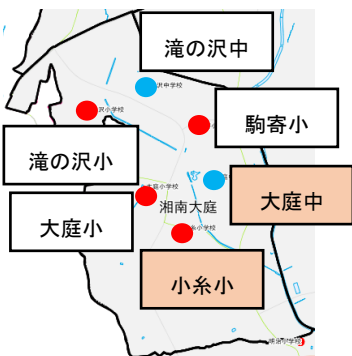
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
大庭小	25	14	12	12		
滝の沢小	28	19	12	12		
駒寄小	20	18	12	12		
小糸小	23	12	12	6	小規模	
大庭中	22	14	13	9	小規模	
滝の沢中	27	18	17	12		

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

- ・滝の沢小学校－滝の沢中学校：約600m
- ・駒寄小学校－大庭中学校：約500m
- ・小糸小学校－大庭中学校：約500m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
大庭小学校	17,410	6,363	628	46	
滝の沢小学校	16,666	6,373	669	43	
駒寄小学校	15,867	4,789	652	41	
小糸小学校	17,427	5,353	650	40	
大庭中学校	21,488	6,818	671	43	
滝の沢中学校	23,586	7,142	799	40	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、大庭小学校・滝の沢小学校・駒寄小学校・小糸小学校と4つの学校が設置されており、大庭小学校の通学区域は東西に約0.9km、南北に約1.4km、滝の沢小学校は東西に約1.4km、南北に約1.1km、駒寄小学校は東西に約1.0km、南北は約1.5km、小糸小学校は東西に約1.3km、南北は約1.4kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、大庭中学校と滝の沢中学校が設置されており、大庭中学校の通学区域は東西に約1.8km、南北に約1.8km、滝の沢中学校は東西に約2.3km、南北に約1.7kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・急激な人口増加に伴う無秩序な市街化を防ぐため、すぐれた緑地資源と変化に富む自然条件を生かした緑豊かな住宅地の開発を、また農業環境の保全・整備を目的として「都市と農業の調和するまち湘南ライフタウン」の総合的まちづくりを行っている。都市計画道路の整備状況を見ると、土地区画整理事業などによる総合的なまちづくりにより都市基盤整備が行われたことから、整備が完了している。
- ・昭和50年～60年代に住み始めた世帯が多く、高齢化率が最も高い。
- ・湘南ライフタウンにおいては、今後さらに、地区の高齢化や住宅の老朽化が進み、大規模住宅団地の再活性化が課題となっている。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会において、滝の沢中学校と秋葉台中学校、石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

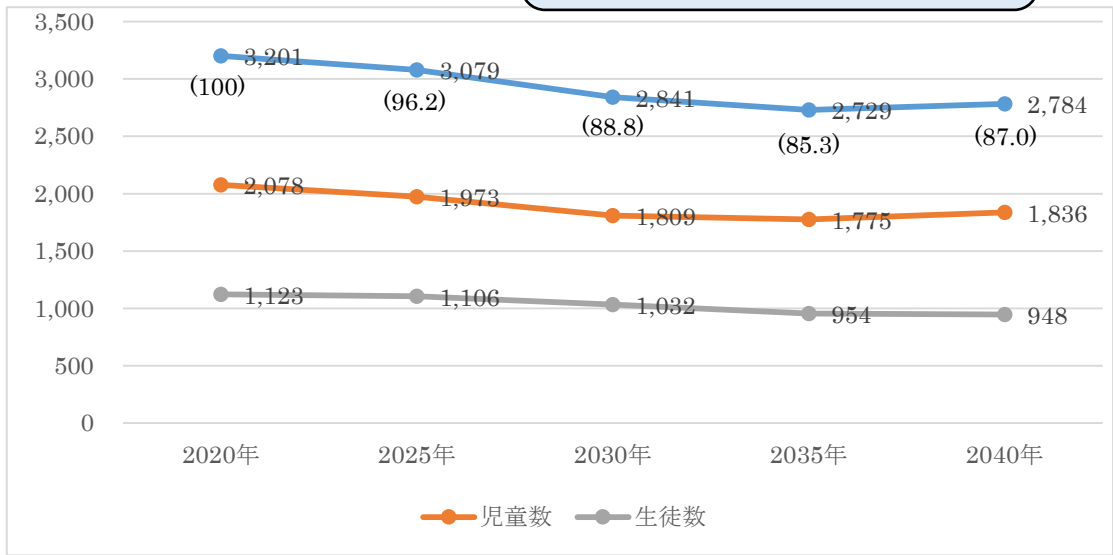
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
大庭小学校	○				
滝の沢小学校	○		○	○(注)	
駒寄小学校	○				
小糸小学校	○		○		
大庭中学校	○				
滝の沢中学校	○				

(注)「滝の沢小学校周辺(遠藤公園含む)」として指定

六会地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	36,816	37,584	38,083	38,468	38,697
2020年比(%)	(100)	(102.1)	(103.4)	(104.5)	(105.1)

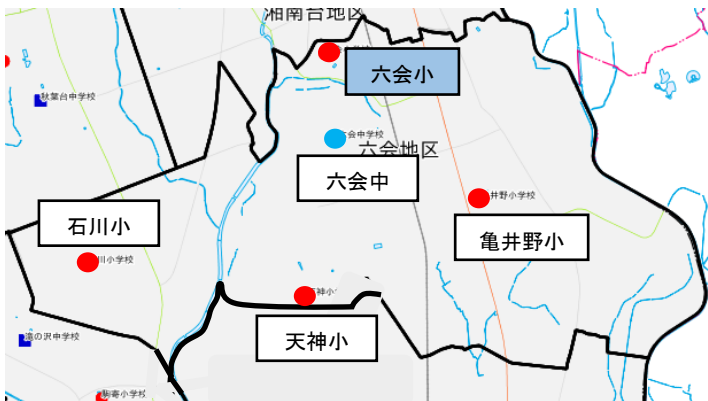
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
六会小	34	28	30	30	大規模	
亀井野小	27	19	24	24		
天神小	20	17	18	18		
石川小	22	20	18	18		
六会中	24	21	20	18		

(2) 学校位置図



注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>
・六会小学校－六会中学校
: 約600m

【参考】

1 校舎等の状況

小学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
六会小学校	31,598	7,906	1,598	21	仮設校舎2棟 (10教室)
亀井野小学校	13,223	5,478	631	43	
天神小学校	15,300	4,028	651	39	仮設校舎1棟 (4教室)
石川小学校	14,508	6,435	948	26	H11増築(8教室)
六会中学校	27,689	8,818	2,290	11	R2屋内運動場改築

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、六会小学校・俣野小学校・亀井野小学校・天神小学校・石川小学校と5つの学校が設置されており、六会小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約2.3km、俣野小学校は東西に約2.0km、南北に約2.1km、亀井野小学校は東西に約1.9km、南北に2.3km、天神小学校は東西に約1.8km、南北は約1.7km、石川小学校は東西に約1.2km、南北は約1.5kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、六会中学校が設置されており、六会中学校の通学区域は東西に約3.8km、南北に約4.0kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、地域の東西を連絡する亀井野二本松線の引地川から、小田急江ノ島線の横断部周辺と、地域の南北を連絡する善行長後線の一部区間などが未整備となっている。
- ・地区内を小田急江ノ島線が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の南部は市街化調整区域であり、農地が広がっている。北部については、駅周辺や国道沿道を除き、低層住宅地が広く形成されている。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、仲原自治会において、六会小学校と湘南台小学校，西俣野中自治会において、俣野小学校と亀井野小学校，石川山田自治会において、天神小学校と石川小学校，桜ヶ丘自治会において、六会小学校と天神小学校，新田自治会において、天神小学校と善行小学校，俣野小学校と亀井野小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、西俣野中自治会において、六会中学校と大清水中学校，石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校，亀井野上町内会・円行東自治会・不動ヶ丘自治会・旭ヶ丘町内会において六会中学校と湘南台中学校，新田自治会において六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

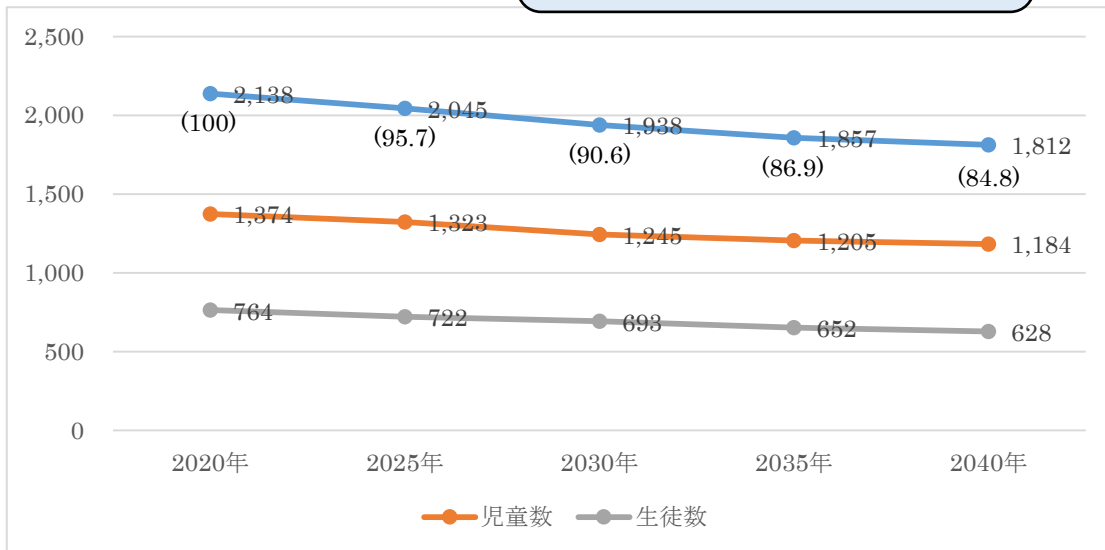
5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
六会小学校	○		○		
亀井野小学校	○		○		
天神小学校	○		○		
石川小学校	○		○		
六会中学校	○				

湘南台地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	32,409	33,377	34,125	34,835	34,873
2020年比(%)	(100)	(103.0)	(105.3)	(107.5)	(107.6)

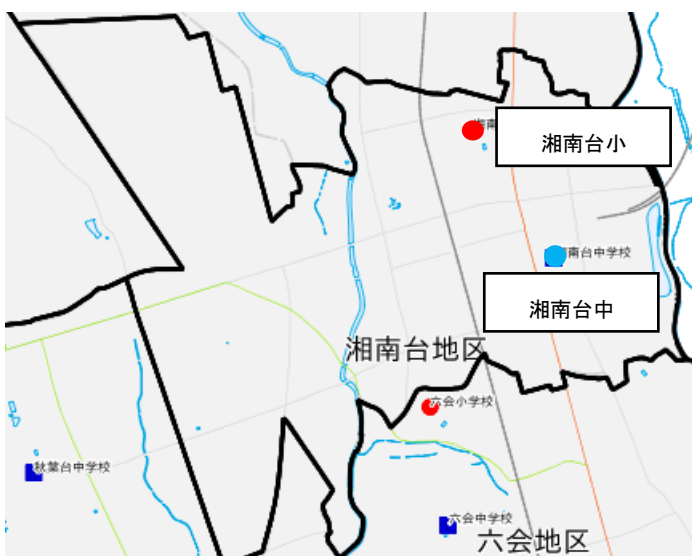
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
湘南台小	27	24	24	24		
湘南台中	20	15	18	18		

(2) 学校位置図



注) 「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

<隣接する小中学校間の距離>

・湘南台小学校－湘南台中学校：約700m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
湘南台小学校	19,870	5,972	632	49	
湘南台中学校	21,443	6,613	789	41	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には湘南台小学校が設置されており、湘南台小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約1.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、湘南台中学校が設置されており、湘南台中学校の通学区域は東西に約1.7km、南北に約2.2kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、湘南台駅周辺地域では土地区画整理事業などにより、都市基盤整備が行われたことから、都市計画道路の整備が進んでいる。また、隣接市や周辺地域を連絡する石川下土棚線、亀井野二本松線などの都市計画道路が未整備なことから、地域東部など地域の周辺部では、生活道路への通過交通の流入が見られる。
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、地域の東西を連絡する亀井野二本松線の引地川から、小田急江ノ島線の横断部周辺と、地域の南北を連絡する善行長後線の一部区間などが未整備となっている。
- ・地区内を小田急江ノ島線や引地川が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の西側はいすゞ自動車などが立地する工業地帯が広がっている。
- ・湘南台駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども立地可能な地域が一定程度広がっている。
- ・今後の土地利用状況においては、湘南台駅周辺の高層マンション計画が進んでおり、特に近年は西側での建設が進んでいるため、状況把握が必要である。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、仲原自治会において、湘南台小学校と六会小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、西俣野中自治会において、六会中学校と大清水中学校、石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校、亀井野上町内会・円行東自治会・不動ヶ丘自治会・旭ヶ丘町内会において六会中学校と湘南台中学校、新田自治会において六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

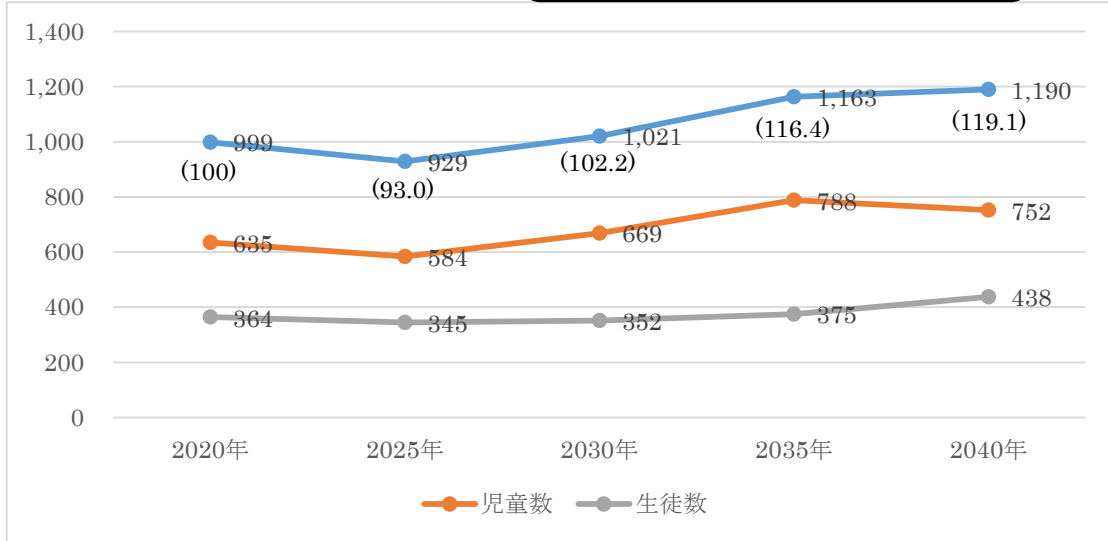
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
湘南台小学校	○		○		
湘南台中学校	○			○(注)	

(注)「湘南台公園周辺(湘南台中含む)」として指定

遠藤地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	11,914	12,211	14,324	14,679	14,911
2020年比(%)	(100)	(102.5)	(120.2)	(123.2)	(125.2)

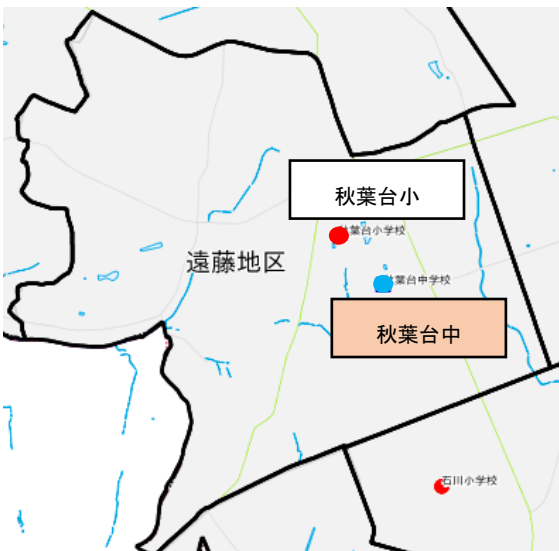
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
秋葉台小	26	19	18	24		
秋葉台中	16	10	9	9	小規模	

(2) 学校位置図



＜注＞「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

＜隣接する小中学校間の距離＞
・秋葉台小学校－秋葉台中学校
：約400m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
秋葉台小学校	14,506	5,418	625	57	H16 大規模改修
秋葉台中学校	16,529	5,130	653	46	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には秋葉台小学校が設置されており、秋葉台小学校の通学区域は東西に約3.0km、南北に約2.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、秋葉台中学校が設置されており、秋葉台中学校の通学区域は東西に約3.2km、南北に約2.8kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、遠藤地区では、土地区画整理事業などにより都市基盤整備が行われたことから、ほぼ整備が完了している。
- ・地区の東側は、区画整理により住宅地や工業地が整備されており、職住近接の土地利用がされている。
- ・鉄道駅から離れているが、バスが充実しているとともに、郊外型の商業施設も多く立地していることから、生活利便性は比較的高く、低層住宅や中高住宅が多く立地している。
- ・地区中央部は市街化調整区域だが、今後、都市拠点としての整備が進められる。
- ・今後の土地利用状況においては、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに隣接した健康と文化の森地区としてのまちづくりが人口約3,000人で進んでいくため、注視する必要がある。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会と石川丸石自治会において、秋葉台小学校と滝の沢小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会において、秋葉台中学校と滝の沢中学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

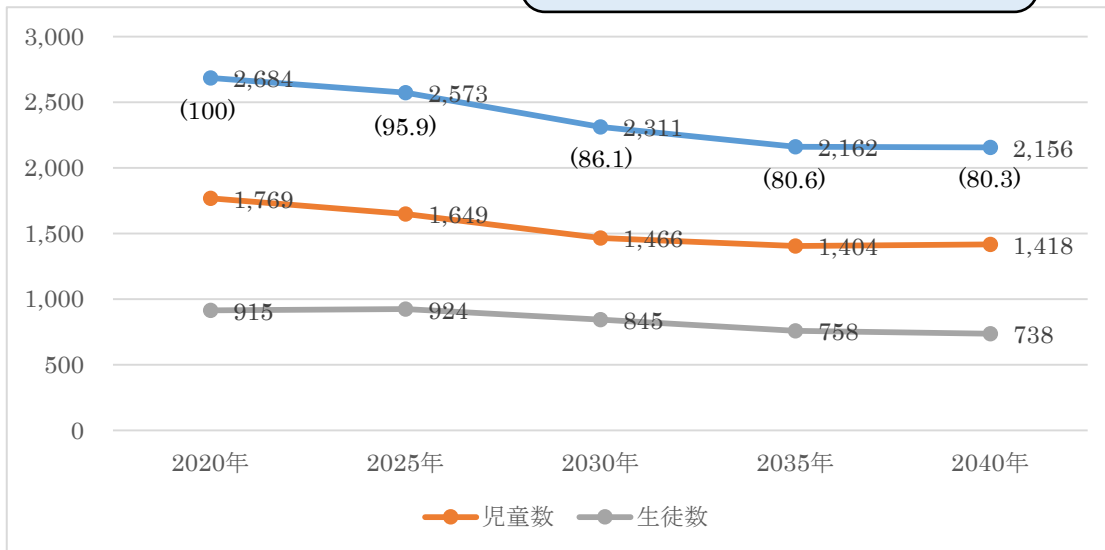
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
秋葉台小学校	○				
秋葉台中学校	○		○	○(注)	

(注)「秋葉台公園周辺(秋葉台中含む)」として指定

長後地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	33,795	33,975	33,965	33,798	33,494
2020年比(%)	(100)	(100.5)	(100.5)	(100.0)	(99.1)

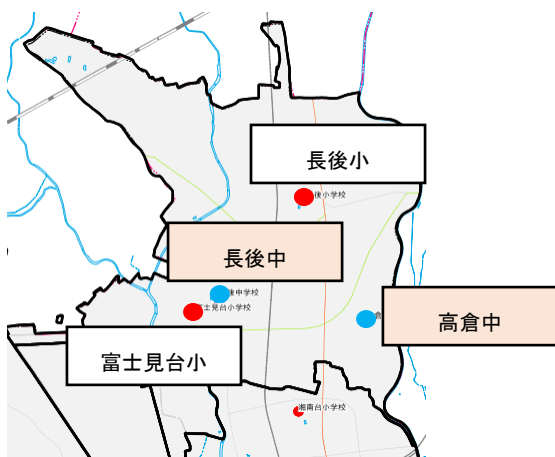
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
長後小	29	24	24	24		
富士見台小	23	21	18	18		
長後中	16	10	10	9	小規模	
高倉中	17	12	11	9	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

＜隣接する小中学校間の距離＞

- ・富士見台小学校－長後中学校：約100m
- ・長後小学校－長後中学校：約1,000m
- ・長後小学校－高倉中学校：約1,000m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
長後小学校	15,410	5,979	646	55	仮設校舎1棟 (2教室)
富士見台小学校	13,657	5,165	626	55	
長後中学校	23,346	6,808	1,977	28	
高倉中学校	18,664	5,678	792	40	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、長後小学校・富士見台小学校と2つの学校が設置されており、長後小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約2.4km、富士見台小学校は東西に約2.2km、南北に約3.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、長後中学校と高倉中学校が設置されており、長後中学校の通学区域は東西に約2.2km、南北に約3.8km、高倉中学校は東西に約1.4km、南北に約3.0kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、高倉下長後線、善行長後線などが未整備となっていることから、小田急江ノ島線を横断する交通などが長後駅周辺に集中し、商店街の歩道がない道路などへの通過交通の流入や、交通渋滞の問題が見られる。また、地域には、狭隘道路なども多くなっている。
- ・地区内を小田急江ノ島線が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の東西には境川と引地川が流れており、その周辺は市街化調整区域となっている。
- ・地区の一部では土地区画整理が行われているものの、古くからまち並みが残っており、駅周辺も含め比較的低層の住宅が広く分布している。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、四辻大塚自治会において、高倉中学校と湘南台中学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

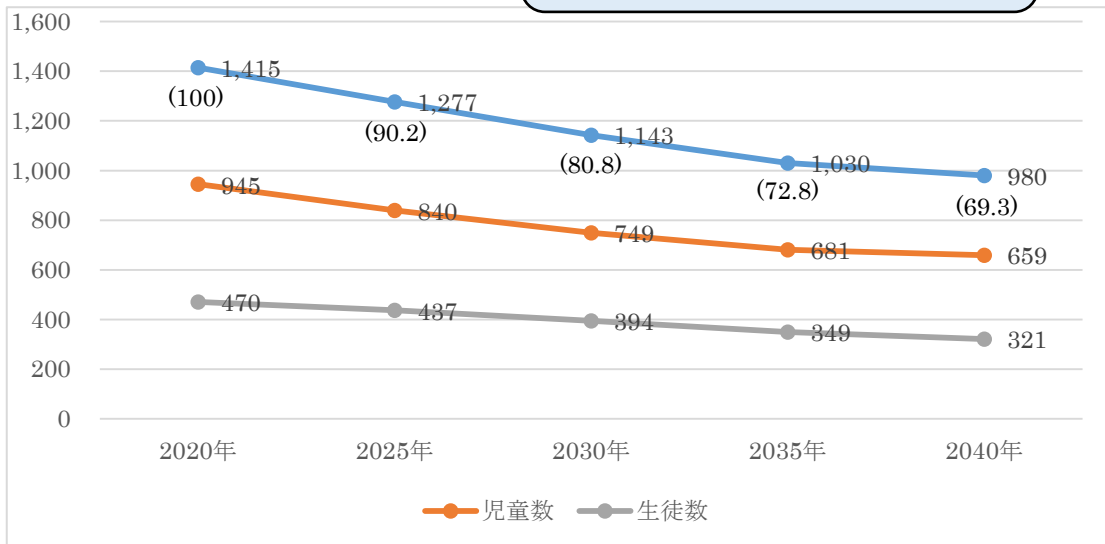
学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
長後小学校	○		○		
富士見台小学校	○		○	○(注)	
長後中学校	○			○(注)	
高倉中学校	○		○	○	

(注)「長後中学校周辺(富士見台小含む)」として指定

御所見地区

※2020年児童生徒数推計に地区別の増減率を乗じて作成。
()内は2020年を100とした時の割合。

1 将来人口推計 (児童・生徒・合計)



	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
地区人口(人)	18,273	18,054	17,623	17,071	16,493
2020年比(%)	(100)	(98.8)	(96.4)	(93.4)	(90.3)

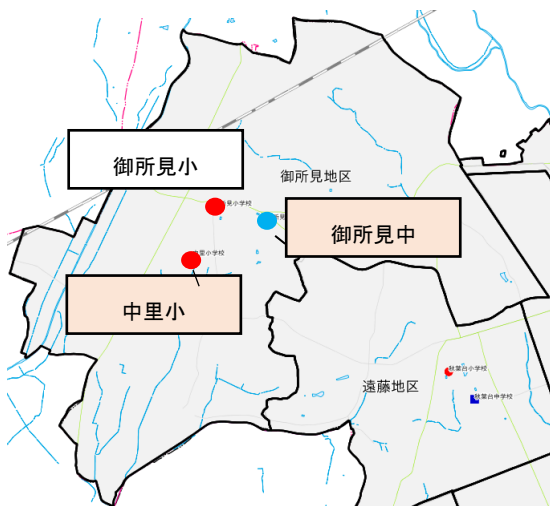
※2017年度藤沢市将来人口推計より

2 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2021年	2030年	2040年	2040年状態	備考
御所見小	22	16	12	12		
中里小	21	11	12	6	小規模	
御所見中	19	12	9	6	小規模	

(2) 学校位置図



注)「使用可能教室数」は、普通教室、仮設校舎普通教室及び一部の転用特別教室を含めた教室数

＜隣接する小中学校間の距離＞
・御所見小学校－御所見中学校：約400m

【参考】

1 校舎等の状況

学校名	校地 (㎡)	校舎 (㎡)	屋内運動場 (㎡)	校舎築後 (年)	備考
御所見小学校	16,338	5,310	627	50	H17 大規模改修
中里小学校	13,692	4,812	615	44	
御所見中学校	22,189	5,131	758	51	

2 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、御所見小学校・中里小学校と2つの学校が設置されており、御所見小学校の通学区域は東西に約3.5km、南北に約3.2km、中里小学校は東西に約2.9km、南北に約2.8kmと13地区内で通学区域においては最も広範囲となっている。

<中学校>

- ・本地区には、御所見中学校が設置されており、御所見中学校の通学区域は東西に約4.8km、南北に約3.9kmとなっている。

3 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、未整備の都市計画道路があるが、北部第二(三)地区土地区画整理事業などにより都市基盤整備にあわせて、整備を進めている。
- ・13地区中、最も広い地区であるが、その多くは市街化調整区域となっているが、既存宅地を活用した分譲住宅等の立地もみられ、住宅が広域に点在している。
- ・横浜伊勢原線の南側の御所見小学校や御所見中学校の周辺が市街化区域となっており、市営古里住宅を含む住宅のほか、商業、工業も立地している。
- ・地区の南東部の一部は、現在、土地区画整理事業が行われており、事業の進捗に合わせて宅地供給が進むことが想定される。

4 自治会・町内会

- ・自治会との関係では、打戻第一自治会と用田第三自治会において、御所見小学校と中里小学校に通学区域が分かれている区域がある。

5 指定避難所・指定緊急避難場所

学校名	指定 避難所	指定緊急避難場所			
		(地震)	(洪水・崖崩れ)	(大規模火災)	(津波)
御所見小学校	○			○(注)	
中里小学校	○				
御所見中学校	○		○		

(注)「御所見小学校周辺(御所見市民センター含む)」として指定